京都府埋蔵文化財情報

第 5 号

大内城跡墳墓発掘調査概要……伊野　近富…… 1
京都大学教養部構内 AP 22 区の梵鐘鋳造遺構 ……五十川伸矢…… 8
古代エジプト遺跡を訪ねて (2)……小山　雅人……14
「葉椀」「葉皿」考……伊野　近富……18
福知山市大内周辺の新発見遺跡……岩松　　保……22
—昭和57年度発掘調査略報—……25
1. 美濃山狐谷横穴群（第2次）　4. 太　田　遺　跡
2. 篠・西長尾奥第1窯跡　5. 土　師　南　遺　跡
3. 篠・黒　岩　窯　状　遺　構　6. 長岡京跡（立会調査）
第1回「小さな展覧会」を終わって……33
府下遺跡紹介 7. 神明山古墳 8. カザハヒ古墳……35
長岡京跡調査だより……41
センターの動向……46
受贈図書一覧……48

1982年 9 月

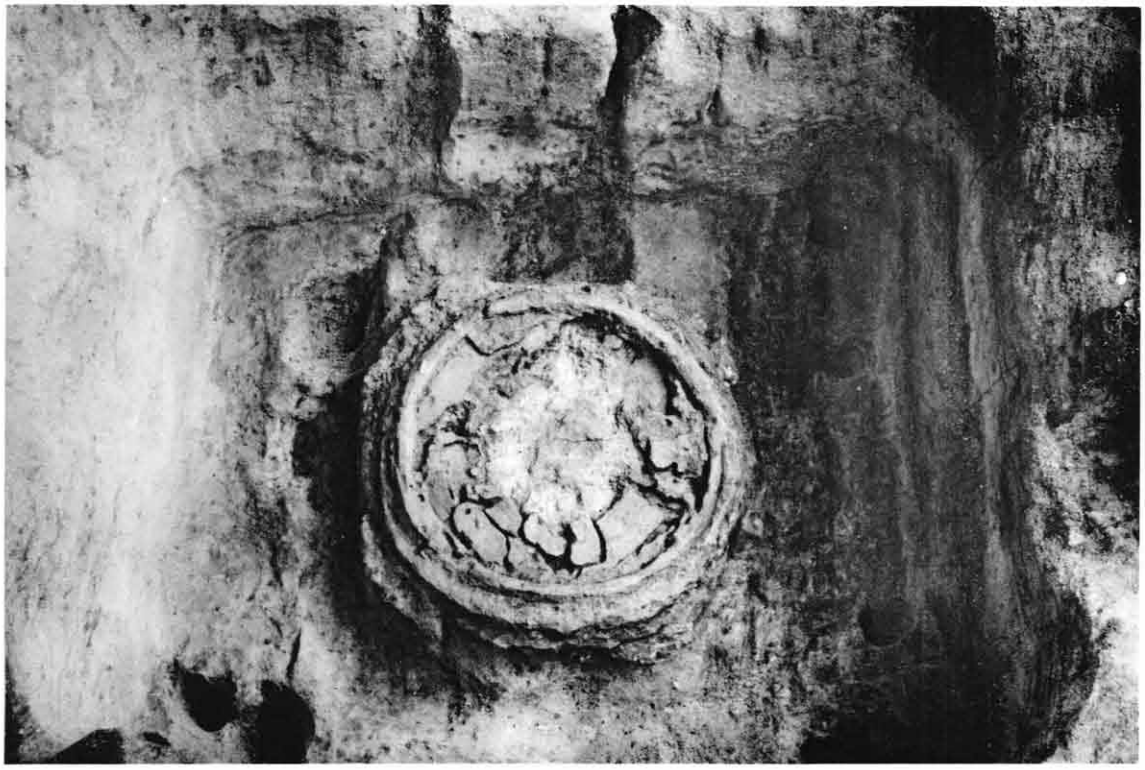
財団法人　京都府埋蔵文化財調査研究センター

図版1　大内城墳墓

(1)　墳墓全景（西から）

(2)　SX300—L検出状況（西から）

図版２　京都大学教養部構内AP22区の梵鐘鋳造遺構



(1)　SK257（北から）

(2)　SK245（西から）

大内城跡墳墓発掘調査概要 <図版1>

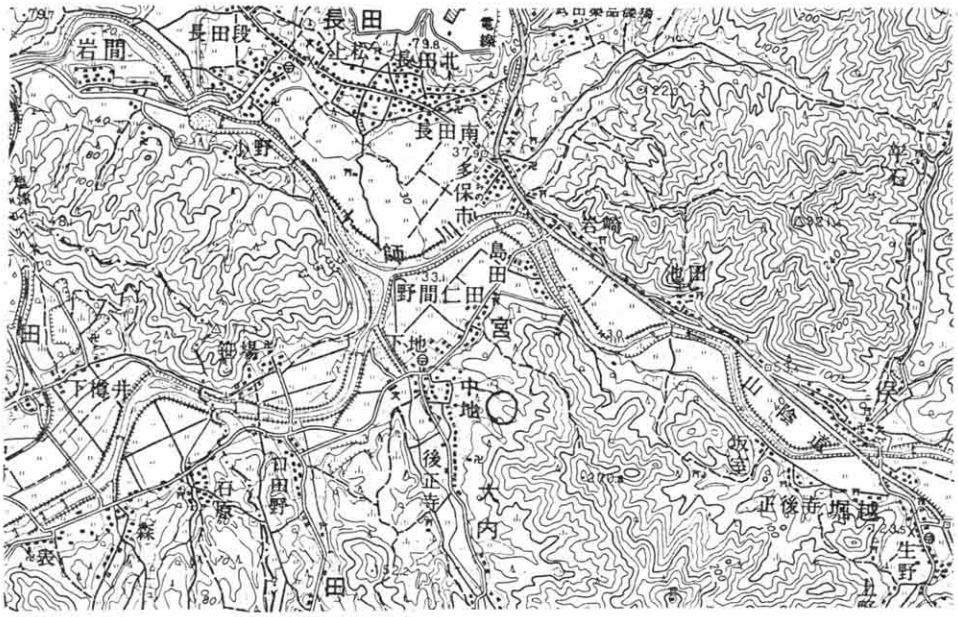
伊野近富

1. はじめに

大内城古墓は，平安時代から室町時代まで断続的に経営された大内城跡の一画を占める鎌倉後期から南北朝時代の遺跡である。まず始めに大内城跡の概略を説明し，その後同墳墓について述べたい。

2. 大内城跡

大内城跡は福知山市の東南部に位置しており，行政区画としては福知山市大内小字平城に相当する。また古代の区画としては丹波国天田郡六人部の地に当る。遺跡は瀬戸内一兵庫県一京都府を結ぶルート（竹田川）と，京都一丹後（土師川および国道9号線）のルートが交叉した地にあり，交通の要衝地であったことが知られる。遺跡は二河川が合流した小平野の東方丘陵にあり，標高50～70mにかけての面積約3万平方メートルが城跡となっている。城跡は少なくとも3か所の郭に分かれており，今回調査したのはもっとも高所に位置する約100m四方の郭の中央部，幅約45m，長さ約100mの地帯である。この地に近畿自動車道舞鶴線の路線計画がなされたことから，事前調査として，昭和56年5月14日から



第1図 調査地位置図 (1/50,000)

昭和57年7月28日まで行われた。その結果3時期に亘る遺跡であることが判明した。第1期は平安時代末期に経営された11棟の掘立柱建物と井戸・広場で構成され，四周に土塁や空堀をめぐらせた時期である。コンテナ（整理箱）で200箱近く出土した土師器皿・瓦器椀・須恵器ねり鉢・甕，中国製青磁・白磁の多さは生活臭と豊富な財力の存在を窺わせており，このことから六人部地方を牛耳っていた領主の館跡と推定している。領主の内容については，六人部荘の荘官を想定している。館の規模の大きさと中国製陶磁器の多量さ（約800片出土）は，本家が八条院・領家が平頼盛という当時最大の権勢をもっていた荘園領主との関係を抜きにしては理解できないだろう。

第2期は，鎌倉後期から南北朝時代にかけて経営された掘立柱建物1棟と，館跡の東北隅にある古墓の時期である。これについては後章で詳述する。

第3期は，館の防御施設にあった土塁や空堀を埋めたて，全体を約20cmほど山土（黄褐色土）で盛土し，四周には高さ50cmほどの土塁を構築した時期である。この時期の遺構は不明確で，遺物もコンテナ1箱分ほどしかない。この点から常時人々が生活しない城としての性格が強く窺われる。室町時代。

以上のように，第1期は館の時期，第2期は墓地の時期，第3期は城の時期として理解できる。この他，遺物として弥生時代の石包丁，スクレイパー，土器片や古墳時代の須恵器杯身片などが出土している。

3.　大内城跡墳墓（SX 300）

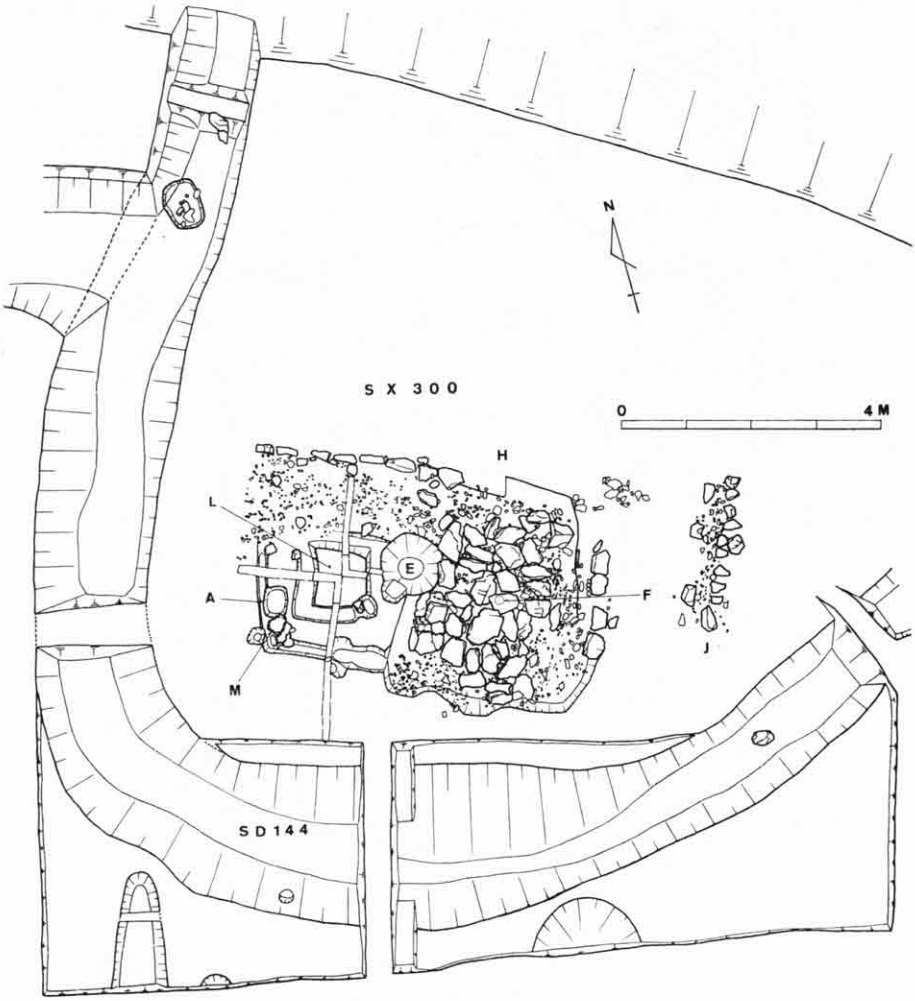
墳墓の調査はまず表土剝ぎから始めた。厚さ数cmの腐蝕土を除くと，東西約6.5m，南北約4mに亘って砂利（径5cm程度）が敷き詰められており，砂利の間から土師器鍋片などが出土した。またこの集石部を区画する幅2m前後の溝（SD 144）も検出した。この状態を空中写真撮影した後，集石を除去する作業を始めた。集石の厚さは西部で約20cm，東部で約40cmであった。この段階の状況を示したのが第2図である。墓域は大きく2区画に分かれる。西部は北辺に 10×25 cm 程度の石を立て並べ，他は盛土が少し高めで，3×3m 程度の方形土壇状を呈する。この区画にA・L・Mの3基の墓が造られていた。東部は西部より一段低く造られた3.5mの方形を呈する（H）。縁辺に 20×40 cm 程度の石を一列に敷き並べ，方形の中央部には 30×40 cm 程度の平石を敷き並べる。この平石直上には2か所（北部・南部に1か所ずつ）黒色土が30～40cmの範囲に置かれており，この近辺から鉄釘数本が出土した。また中央の集石中には墓1基（F）が造られていた。この2区画の接する所にはもっとも大きな墓Eが造られている。

蔵骨器の内容は以下のとおりである。

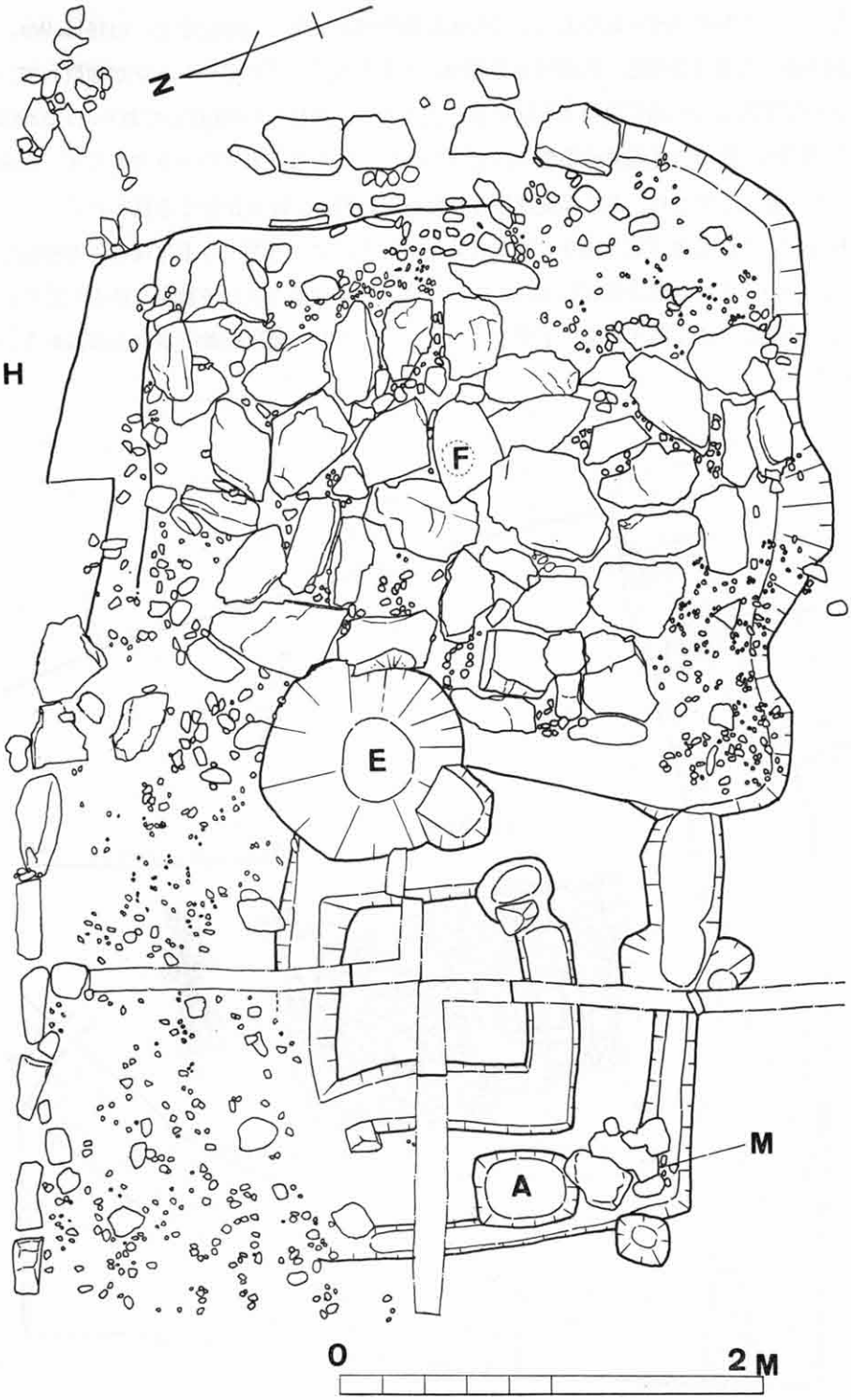
Aは，須恵器三耳壺（第4図3）の中に骨を入れ，上部には和鏡の破片（2片）を入れ

たもので，これに丹波系鉢を蓋として転用し被せてあった。壺は完形で，口径11.9cm，器高28.6cm。色調は青灰色，外面はタテ方向のミガキ成形。プロポーションが類似している瀬戸の灰釉四耳壺の編年観によれば14世紀代である。鉢は約2/3残存しており，口径29cm，器高14.3cm。色調は外面暗赤褐色。内面は淡褐色。条痕は1本ずつヘラで施こす。内面下半はやや磨滅しており，ある程度使用されたと思われる。片口が付くと思われる。

Eは，丹波系大甕（第4図6）を蔵骨器としたもので，肩部より上はほとんど破損しており，その一部は内部に転落していた。この他上半分には円礫が多数流れ込んでおり，中国製褐釉壺片（第4図4）を，下半分には骨が入れられ，瀬戸灰釉小壺や土師器皿1点を検出した。



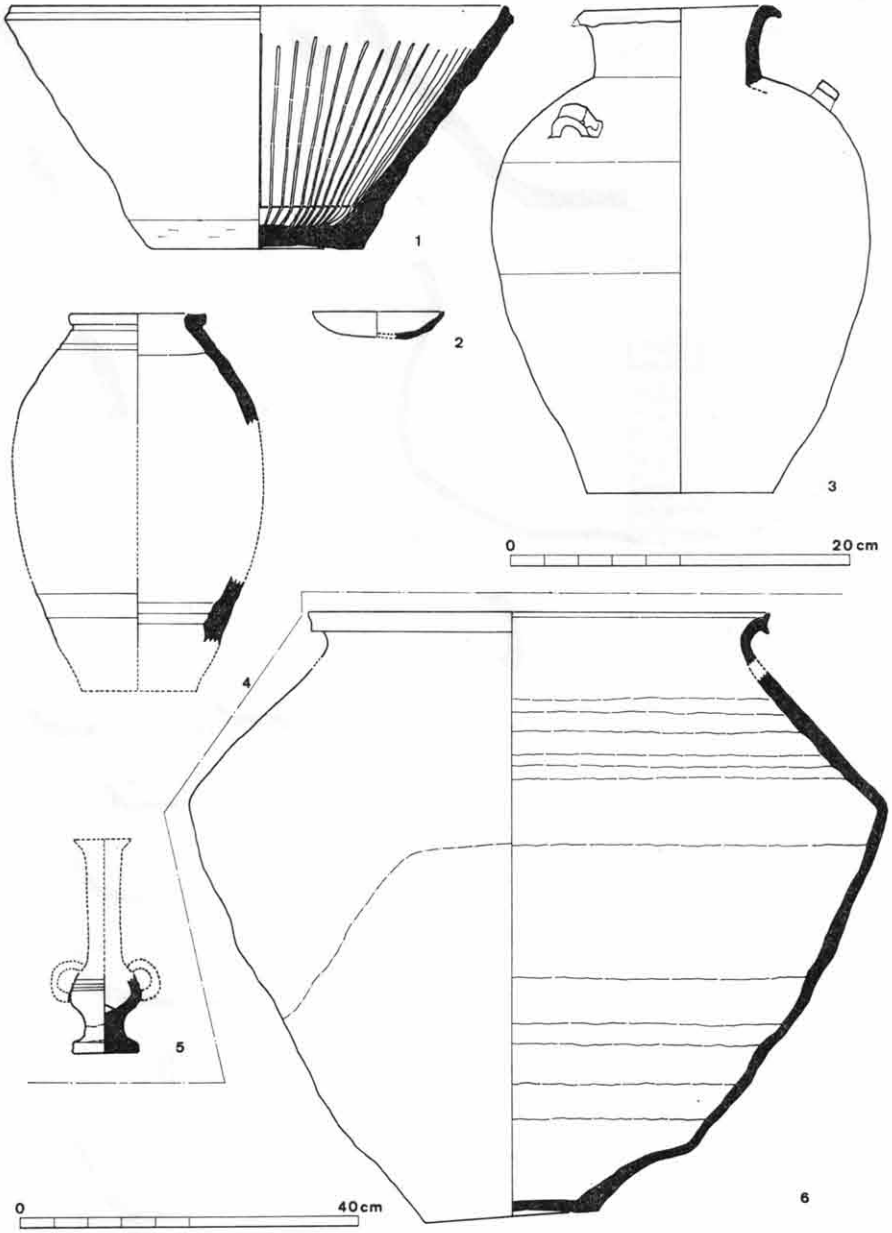
第2図 調 査 地 平 面 図



第3図　SX300　平　面　図

Fは，他の蔵骨器が穴の中に埋置されているのに対し，集石の中に置かれていた。蔵骨器は土師器鍋（第5図8）で，蓋としては須恵器ねり鉢（第5図7）が転用されていた。なお鉢はかなり使用されている。いずれも完形。

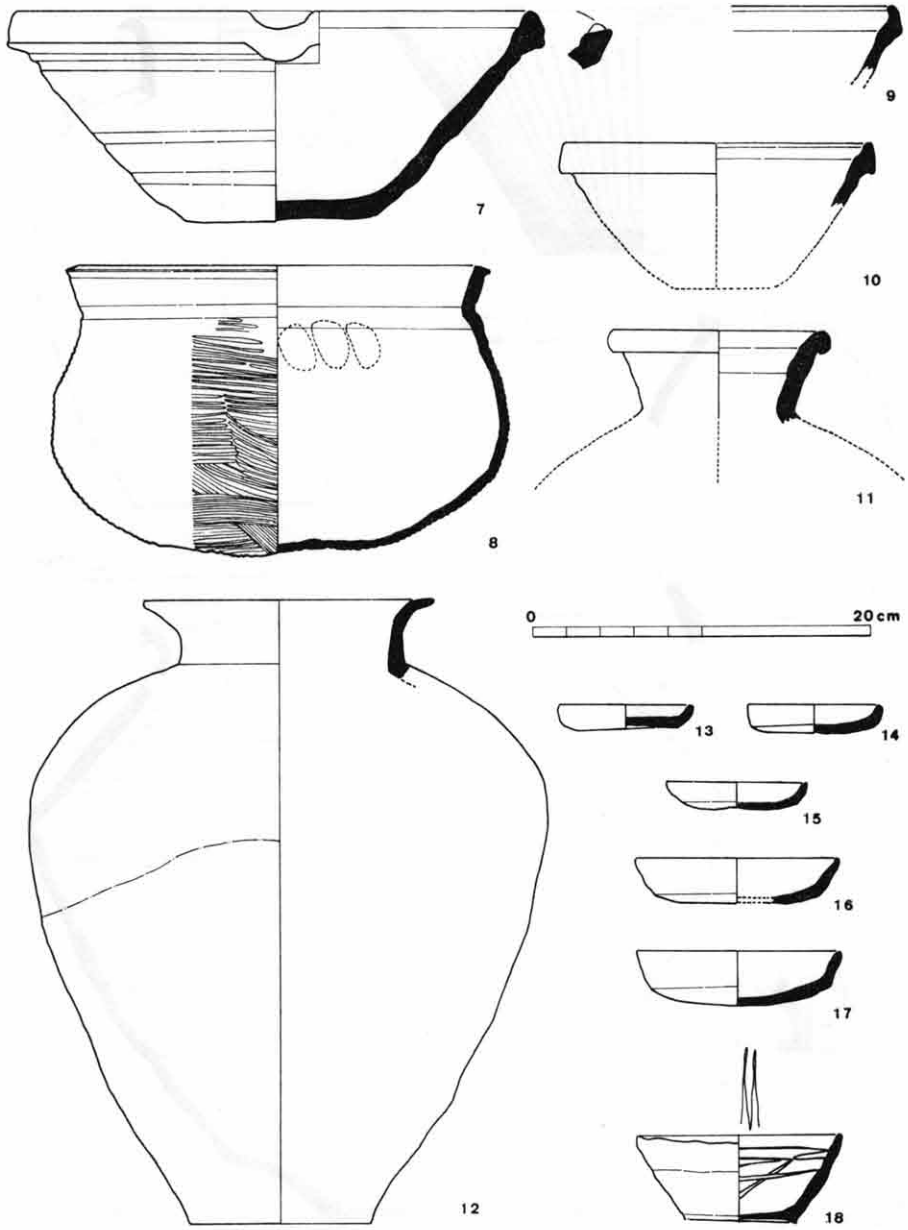
Lは，層位としてもっとも古い段階のもので，一辺約80cmの方形掘形を掘り，その中央



第4図 出 土 土 器 実 測 図
S X300-A; 1•3, S X300-E; 4～6, S X300 上層（集石内); 2

に丹波系？壺を置き，蓋は須恵器甕・壺の体部を一部割り取ったものを転用していた。これらの遺物のまわりは黒色土を入れ，蓋の上約20cmは黄褐色土を入れてあった。完形。

以上の諸施設が造られた順序は，第1に墓域を約20cmの厚さに盛土し，この段階でHを造る。Hに伴う蔵骨器は不明だが，第5図9～11などが鎌倉後期に属するものであり，も



第5図　出　土　土　器　実　測　図
S X300-F；7•8，S X300上層（集石内）；9～11，S X300-L；12，SBBI；13～18

っとも古い一群なので，そうであった可能性はある。この場合２か所の黒色土の存在は示唆的である。

第２に西部の区画を造り，この中央にＬを埋置する。第３に２つの区画を統合した形でＥを造り，この段階で溝 (SD 144) を掘り，結界を完了させている。遺物はこの段階まで鎌倉時代後期に属するものである。

第４にはＡ・Ｆ・Ｍなどを埋置し，遺物から南北朝時代にすべての造墓行為が完了したと思われる。なお，Ｅの中に入っていた瀬戸灰釉小壺は南北朝時代と思われるので，Ｅは数世代に亘って使用されたとも考え得る。

4. ま と め

以上のように鎌倉時代後期から南北朝時代にかけての墓であることが判明した。この被葬者について特定できる資料はないが，次の点からある程度の推定はできよう。(1) 平安時代末期に構築された館跡の区画を意識し，または踏襲し，造営されている。館跡の東北隅に造ったことは，館の「鬼門」という意識があったと思われる。(2) このような意識は，館の時期から約100年経てはいるが，血縁的なつながりに由来すると思われる。(3) 平安時代末期の施設は六人部荘の荘官屋敷跡と推定しており，六人部荘が室町時代まで皇室領から天龍寺領として経営されていた事実を考えれば，墓の造営者が荘官であった可能性は高いと言えよう。ただし墓に埋葬されたのが歴代の荘官に限定されるのか，家族墓なのかどうかは今後の検討を待たなければならない。この点を解明してゆく手だては，墓の構造の差の意味と，蔵骨器の差の意味を知ることである。

墓域は約180㎡と，他の集落跡と比べればひじょうに狭いものだが，日常の生活空間の残滓を色濃く墓地が反映していることは，十分考えられ，今後大いに注目すべき遺構と言えよう。古代から中世にかけての六人部地方の歴史を考える上で恰好の資料と言えるが，それにも増して大きな変革期を経て，かろうじて現代にまで残ってきた意味は大きい。地方史の一断面が鮮明に把握できたからである。現在，近畿自動車道舞鶴線の路線内であるために発掘調査が行われたが，現代科学の粋を集めた土木工学によって，遺跡の活用を考慮すべきと考える。

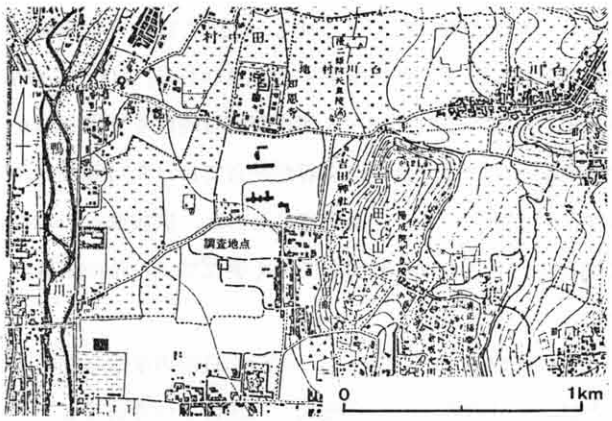
（伊野近富＝当センター調査課調査員）

京都大学教養部構内ＡＰ22区の梵鐘鋳造遺構＜図版２＞

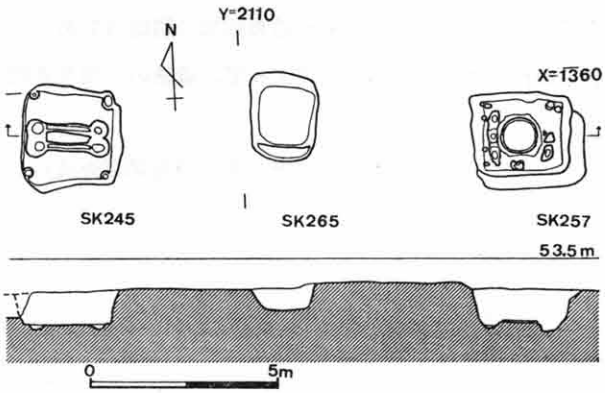
五十川　伸　矢

1.　はじめに

京都大学構内遺跡調査会　（会長　川上 貢）は，京都大学教養部ＡＰ22区の発掘調査で，平安時代の梵鐘鋳造遺構を発見した。調査地点は，吉田山の西麓，北白川扇状地の南端部に位置し，現地表の標高は約54m である（第１図）。鋳造遺構は，東西に並ぶ３基の土坑（ＳＫ257・ＳＫ265・ＳＫ245）で構成され（第２図），そのうちＳＫ257では，底面に梵鐘鋳造のため円形の定盤が完存していた。また，多数の鋳型，銅滓が土坑から出土し，古代の鋳造技術を解明するための好資料を提供することになった。なお，これらの遺構は，埋め戻しの上，永久保存することが決定している。



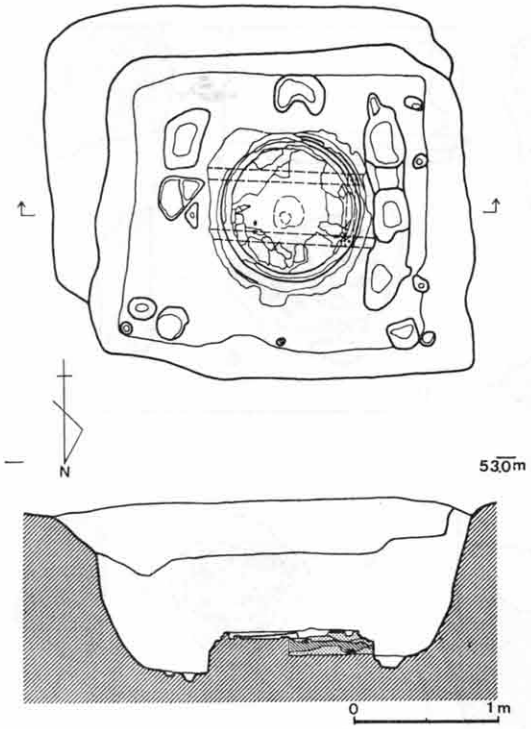
第１図　調査地の位置（明治25年仮製地形図）



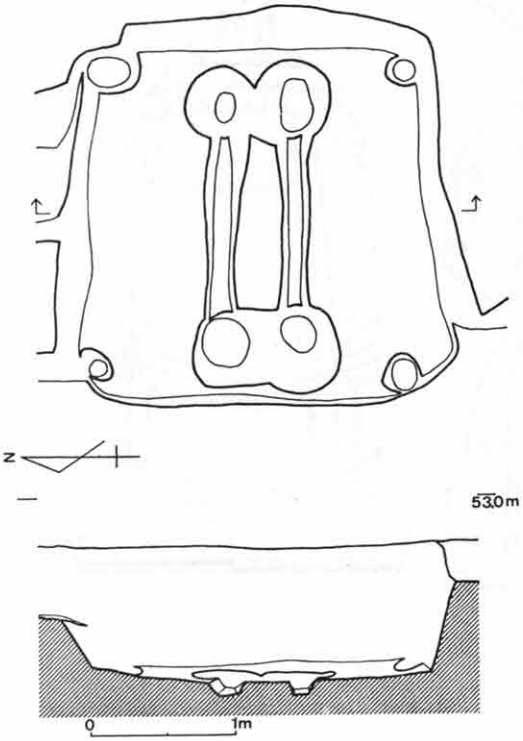
第２図　鋳造遺構配置図

2.　遺　　構

３基の土坑のうち，ＳＫ257は，ほぼ一辺2.5mの平面隅丸方形の掘形をもち，深さは検出面から１mをはかる(第３図)。底面に梵鐘鋳造のための円形の定盤を検出した(図版第２)。定盤は，黄色粘土を用いて形成し，全体を焼成している。定盤の表面には，幅約７cm，



第3図　ＳＫ257　実　測　図



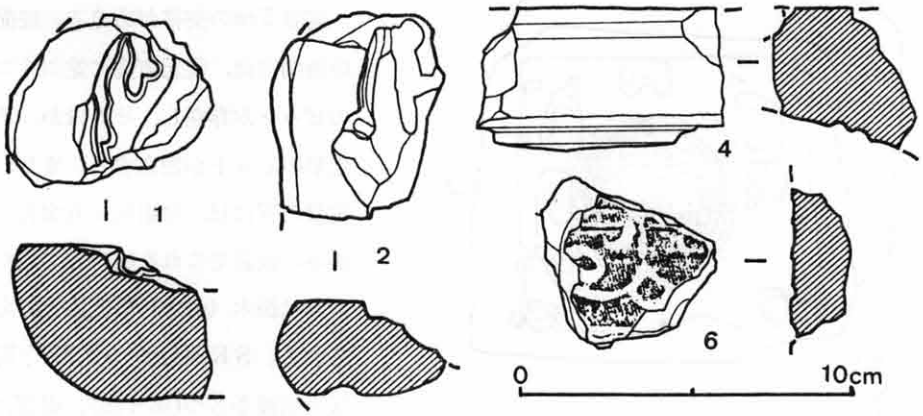
第4図　ＳＫ245　実　測　図

高さ５㎝の突帯がめぐる。底面の西側には，南北方向に並ぶ４つのピットが存在し，そのほか，不定形のピットが散在する。また，定盤の下には，井桁状に丸太材を組み，鉄釘でこれを結合していた。これは掛木（締木）の痕跡と考えられる。ＳＫ245は，ＳＫ257と同様の規模をもつ(第４図)。底面には，中央部東西方向に，幅0.2ｍの２本の溝があり，四隅にはピットがある（図版第２）。溝の両端は円形をなし，両溝がつながっている。ＳＫ265は，南北2.5m，東西1.8m の楕円形の掘形をもち，深さは0.6mである（第２図)。土坑内には，暗灰色粘質土がつまり，溶融した曲面をもつ粘土塊が多量に出土した。ＳＫ265 は溶解炉の基礎あるいはフイゴを設置するための土坑の可能性がある。

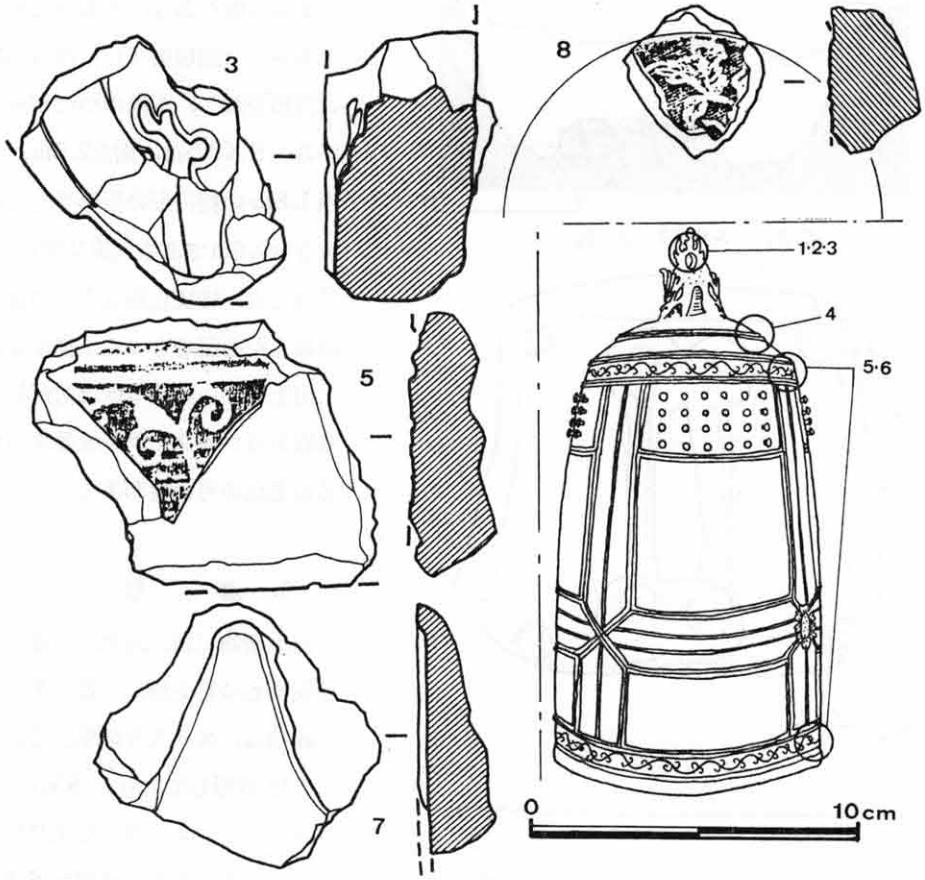
3. 遺　　物

出土遺物には，鋳型，溶融した曲面をもつ粘土塊，土器がある。

鋳型は，スサ入りの粘土を焼きしめて成形しており，ＳＫ257・ＳＫ265 からは，真土を塗りつけた平滑な曲面をもつ鋳型が多数出土した。これらには，２本の凹線をもつ梵鐘の笠形の部分（第５図-4）や，上帯もしくは下帯の唐草

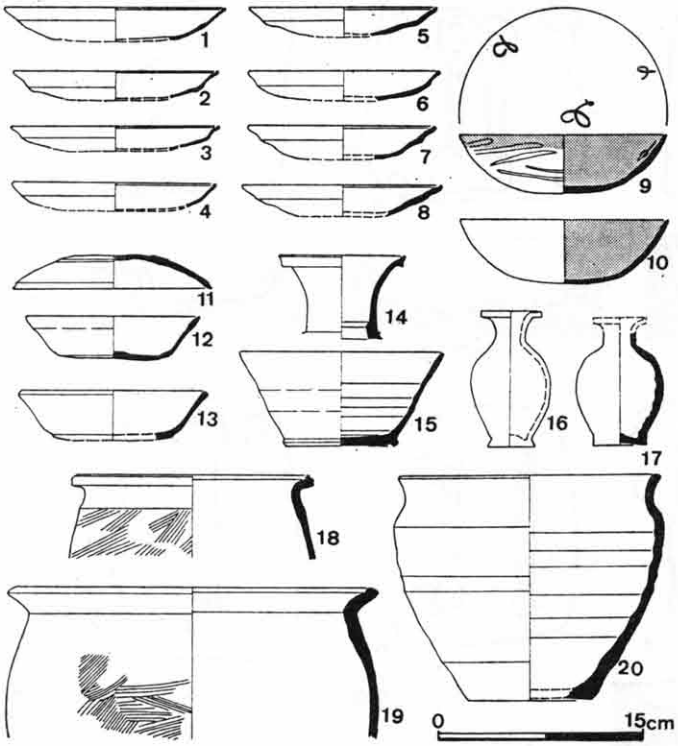


第5図　SK257　出　土　鋳　型



第6図　SK265　出　土　鋳　型

文様を彫りこんだもの（第5図-6，第6図-5）がある。また，別造りによると思われる龍頭の鋳型（第5図-1・2，第6図-3）も出土した。SK265からは，多量の粘土塊のほか，



第７図　ＳＫ265（１～６・18・19土師器，９・10黒色土器，11・12・14～16・20須恵器），ＳＫ257（７・８土師器，13・17須恵器）出土土器実測図

和鏡の鋳型（第６図-8）などが出土した。溶融した曲面をもつ粘土塊は，溶解炉の残片と考えられる。

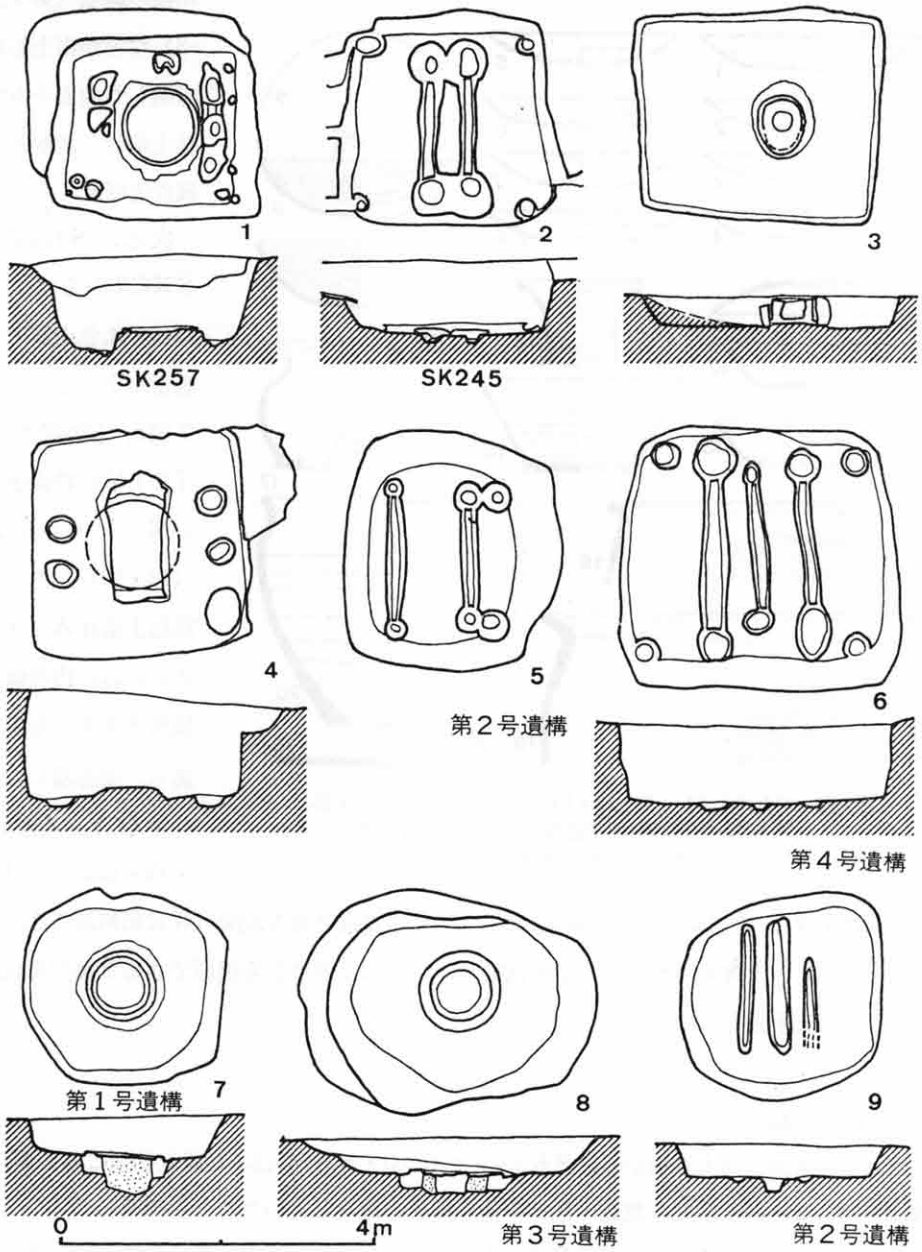
次に，ＳＫ265・ＳＫ257からは，土師器・黒色土器・須恵器が出土した（第７図）。土師器には，「て」字状口縁手法の皿（１～８），甕（18・19）がある。黒色土器杯Ａ（９・10）には，内外面に篦磨きをもつものがある。須恵器には，杯蓋（11），杯身（12・13・15），瓶（14），水瓶（16・17），鉢（20）などがある。これらは，平安京Ⅱ期古段階（10世紀初頭ごろ）の年代を示すものと考えられる。この年代観は，出土した鋳型から復原できる梵鐘の型式による年代観[注1]と矛盾しない。

4. 小　結

検出した遺構と出土遺物から，ＳＫ257・ＳＫ265・ＳＫ245は，10世紀初頭ごろの鋳造遺構であること，そして，梵鐘・鏡その他の製品を鋳造していたことが判明した。

こうした梵鐘鋳造遺構は，京大教養部ＡＰ22区以外では，平安時代以前のもの３例（兵庫県多可郡中町多可寺・大津市長尾遺跡[注2]・京都市太秦広隆寺），鎌倉時代１例（奈良県桜井市山田寺[注3]），室町時代３例（長野県上伊那郡飯島町寺平遺跡[注4]・岐阜県恵那郡坂下町金屋遺跡[注5]・滋賀県愛知郡秦荘町軽野正境遺跡[注6]）が発見されている（第８図）。そこで，これらとＡＰ22区検出の鋳造遺構について，比較検討を行う。

まず，梵鐘鋳造のための土坑は平安時代以前のものでは，平面形がほぼ一辺2.5m前後



第８図　梵鐘鋳造遺構集成図（１・２京都大学教養部構内ＡＰ22区，３兵庫県多可郡中町多可寺，４京都市太秦広隆寺，５・６長尾遺跡，７～９長野県上伊那郡飯島町寺平遺跡）

の隅丸方形を示すものが多い。深さは，削平をうけたと考えられる多可寺例をのぞくと，ほぼ１ｍ前後で，比較的規模は類似しており，室町時代の寺平例では，平面形が不整形で，浅いのと異なる。土坑の底に据えられた定盤は，京大ＡＰ22区ＳＫ257・多可寺例・広隆寺

例で，大きさが異なるのは製品の大きさによるものであろう。定盤が残存しない例では，底面に２本あるいは，３本の溝が存在するが，これは，定盤の下部に据えられた掛木の痕跡と考えてよいだろう。ＡＰ22区ＳＫ257では，定盤の下部に掛木と考えられる丸太材の痕跡を検出したが，基本的に同じ構造とみてよい。また，長尾遺跡２号遺構で，３本の溝があるのは，土坑がやや大型なのと対応するのかもしれない。寺平例では，平安時代以前の定盤とは異なり，定盤の中央に砂をつめているが，これは，空気抜きと考えられ，他例と著しく異なり，現在の鋳造方法につながるものであろう。

土坑の底面のピットは，ＡＰ22区ＳＫ245や長尾遺跡４号遺構のように四隅にあるものと，ＡＰ22区ＳＫ257や長尾遺跡２号遺構のように一辺にしかないものがある。これらは，鋳造のための土坑の覆屋の柱穴と考えるよりも，鋳上がった梵鐘をつりあげる構架材の設置のためのものと考えた方がよいだろう。ピットがない多可寺例では，土坑の一辺に斜面をもうけて，梵鐘を引きあげる手法をとったのであろう。

以上のように，梵鐘鋳造のための土坑は，鎌倉時代以前では，一辺2.5m程度の隅丸方形の平面形で，深さ約１mの土坑の底に，掛木を設置した定盤を据えつけるという構造をとったものと考えてよい。また，鋳上がった梵鐘のとり出し方には，構架材を用いて，垂直につりあげるものと斜面を引きあげるものの２種があった。ところが，室町時代のものには，掘形がやや不整形で，定盤に，空気抜きの構造をもつものが，あらわれるという変化をしめすと考える。

さて，多可寺・長尾遺跡・太秦広隆寺・山田寺・寺平遺跡例では，近接して寺院が存在し，梵鐘の供給先は容易に推定できる。しかし，ＡＰ22区の鋳造遺構の場合，梵鐘の供給先を確定することは困難である。また，ＳＫ265から，鏡などの鋳型が出土したことに注目すべきである。すなわち，梵鐘のみならず，各種の製品を鋳造したという事実は，この工房が，特定の寺院などとのみ直結するものではなく，広範な需要に応ずる工房であった可能性をも示しているからである。

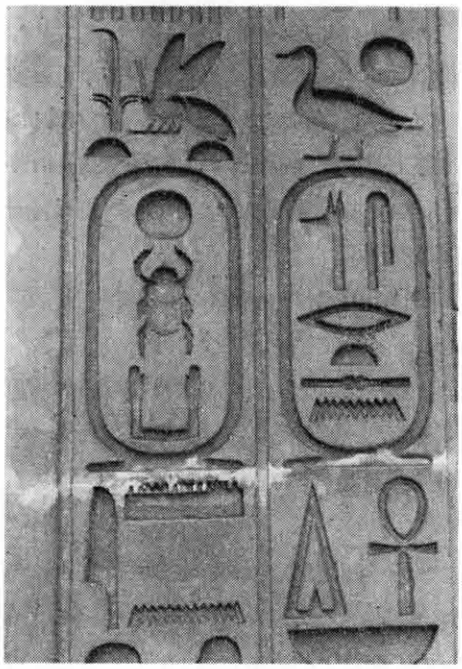
なお，坪井良平氏には，数度にわたって，発掘現場に足をお運びいただき，梵鐘鋳造遺構や，その製作技術について，色々と御教示いただいた。また，（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター，兵庫県多可郡 神崎 勝氏より，未発表資料の提供を受けた。ここに厚く感謝の意を表します。（五十川伸矢＝京都大学文学部助手）

注１　坪井良平『日本の梵鐘』1970年
注２　林 博通「梵鐘を鋳造した遺跡の調査」『月刊文化財176号』1978年
注３　奈良国立文化財研究所「山田寺第３次（講堂・北面回廊）の調査」『飛鳥・藤原宮発掘調査概報10』1980年
注４　友野良一「寺平遺跡の梵鐘鋳造跡」『月刊文化財194号』1979年
　　長野県上伊那郡飯島町『寺平遺跡』1980年
注５　坂下町教育委員会『岐阜県恵那郡坂下町金屋・星の宮両遺跡発掘調査資料報告書』1975年
注６　滋賀県秦荘町教育委員会『軽野正境遺跡発掘調査報告書』1979年

古代エジプト遺跡を訪ねて（2）

小　山　雅　人

Ⅲ　中　王　国



第1図　センウォスレー世のカントゥーショ（王名）（カルナック神殿内の同王のキオスク）

ギーザの大ピラミッドとサッカーラのマスタバ墳墓群を今に残す古王国時代と，テーベの諸神殿や西テーベの王家の谷・貴族の墓で代表される新王国時代との間にあって，エジプト中王国という時代は，かなり地味であるという印象は否定できない。中王国の諸王もピラミッドを造ったが，煉瓦造りの彼らの奥津城はいずれも砂礫のマウンドに過ぎない。また，様々な文献史料によって知られる彼らの諸神殿も，あるいは地上から消え，あるいは後世の諸王の建築の石材を得る為に解体，転用され，今も残るものは殆どない。王にしてかくの如しであるから，貴族クラスの墓も，いくつかは残っているが，殆どが四千年という歳月の彼方に消え去ってしまっている。

美術一般にしても然りである。エジプト国内，あるいは欧米の博物館に陳列された古代エジプトの遺品を目にする人々の多くは，華麗極まりない新王国の作品や，人類の至宝と言うべき古王国の芸術作品の印象に圧倒され，数量に於いても劣る中王国の遺品は，ほとんど見過してしまうであろう。

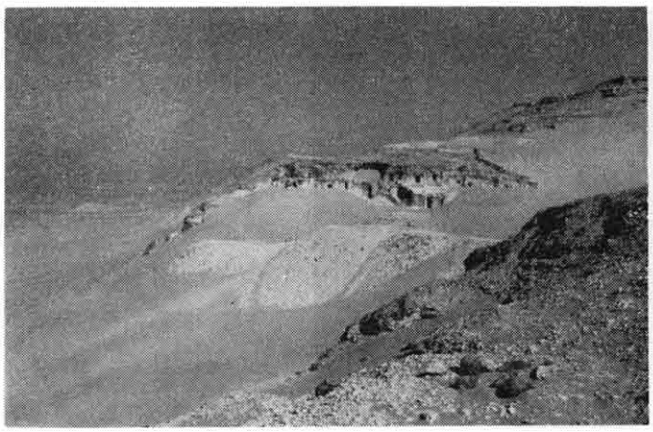
しかしながら，中王国時代の歴史は，古王国時代よりもはるかによく分かっているのである。それは，遺族官僚達の残した夥しい石碑の多くが紀年と共に自己の事跡を，特に王に関連づけて語っているからであり，またパピルスに残された文学作品も，エジプト文学の黄金時代とも言うべき中王国に書かれたものが多く，しかも史料的価値のある作品が少なくないからである。そして，中王国の歴史を何よりもよく教えてくれるのは，メンフィス・テーベといった首都クラスではなく，中エジプト諸州の豪族達の岩窟墓に刻まれた彼らの自伝なのである。言ってみれば，中王国，そしてそれに先行する第一中間期は地方の

時代であったのである。

紀元前2181年頃，古王国の最後の王朝第６王朝はピオピ二世の長い治世とそれに続く２人の王と１人の女王（ニトクレト：ニトクレス）の治世を最後に瓦解する。第７・第８王朝が興ったと史書にはあるが，史料が殆どなく，唯，混乱の時代が数10年間続いたことが推察されるだけである。恐らくエジプトの各地に豪族が乱立していたのであろう。やがて前2160年頃，上エジプト第20州＝ヘラクレオポリスの支配者アクトイ一世が王を称し，第９王朝を開いた。一方，上エジプト南部に於いては，テーベが次第に勢力を伸ばし，前2133年頃メントホトペ一世が第11王朝を創建した。やや遅れて前2130年頃，ヘラクレオポリスでは第10王朝がとってかわった。こうして第一中間期の後半は南北朝時代になるのである。最初の数10年間はテーベ勢力の北進があったようであるが，前2080年頃からは南北朝の平和共存時代が30～40年程続く。そして前2047年の「ティス（上エジプト第８州）の反乱」を機に，テーベは一気に北朝ヘラクレオポリスの第10王朝を滅ぼし，前2040年頃中王国が始まるのである。

第11王朝は，エジプト再統一を果したとは言っても，決してこの国の北半部に確固たる勢力を築けなかったらしい（神殿等の建築を行っていない）が，エジプトは再び繁栄の時代を迎えた。第11・第12王朝の交替に関しては，宰相アメネムヘーのクーデタが通説となっているが，むしろ中国史でいう禅譲に近い形で行われたと思われる。第12王朝の200年間は，第11王朝の50年間にも増して繁栄の時代である。第一中間期という混乱期を経た王の理想像は，古王国に於ける「神」というより，むしろ「よき牧夫」であり，対外戦争は殆どなく，王は公共事業に精力を傾け，古代エジプト人の最も幸福であった時代であった。

第一中間期から中王国にかけての大まかな歴史を述べたが，これは諸王の碑文もさりながら，中エジプトの諸侯の墓の刻文によるところが少なくないのである。南北朝時代から中王国にかけて，ベニ・ハサン（上エジプト第16州），エル・ベルシエ及びシェイク・サイード（同第15州），メイル（同第14州），デール・エル・ゲブラーウィ（同第12州），アシ



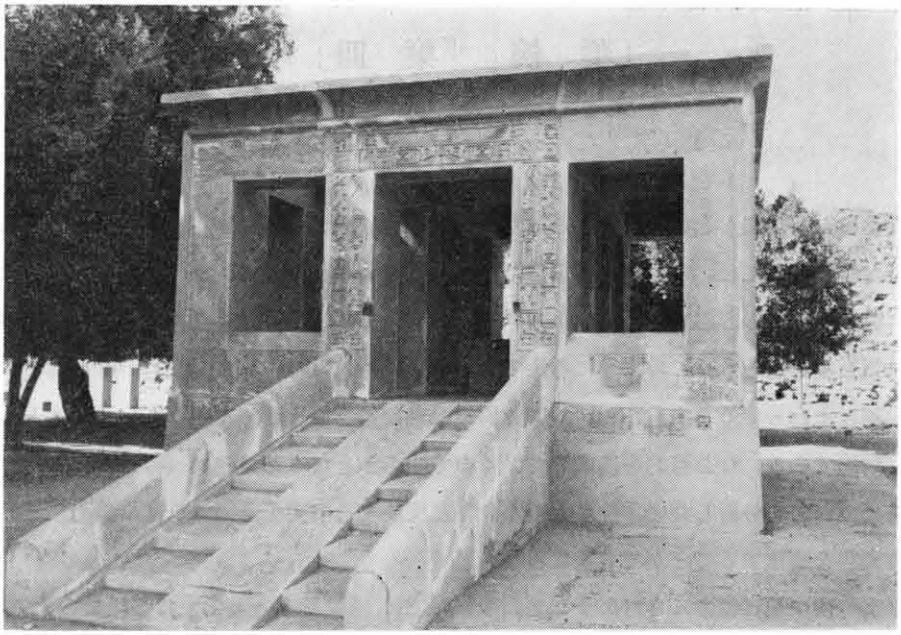
第２図　メイルの岩窟墓群

ウト（同第13州）等に岩窟墓を掘り，様々な壁画と刻文を残した彼ら地方豪族達は，この混乱から回復の時代を生きた最良の証言者なのである。彼らの勢力には当然盛衰があり，また南北朝いずれかに属していても，スキがあれば反乱をする州があり，逆に滅亡に至るまでその運命を共にする州もあり，また日和見の州もあった。エジプト国王の再統一が成り，中王国が成立した後も，彼らの勢力は無視し得ず，王朝が最終的に中央集権を確立したのは，実に第12王朝も後半のセンウオスレ三世（前1878～1843）の治下であった。

われわれの旅行には，この中エジプトの遺跡を訪ねる為に4日間の日程が組んであった。第一中間期から中王国にかけての歴史に関連するのは，ベニ・ハサンとメイルであったが，特に観光ルートから全く外れたメイルの岩窟墓見学は印象的であった。

宿をとったメニアの町から，例によって猛スピードのタクシーでメイルの村に着いた。墓の番人の長に丁重に挨拶し，砂漠を越えた岩窟墓まで同行してもらうことになった。砂漠越えの交通機関はトラクターである。それやこれやを待っていると村人が集まって来る。滅多に外国人の来ない村なのであろう。学校で英語を習っているらしい若者が「ドコカラ来タノデスカ」と聞いて来る。わざと英語で答えず，カタコトのアラビア語で，「日本カラ来マシタ」と言うと，周りの連中がどっと湧く。この辺が，外国人も自分と同じ言葉で話すべきだと思い込んでいる欧米人と違うところである。この村に限らず，エジプトでは，時々このカタコト・アラビア語を使ってみたが，反応は実に良い。もっとも，こちらの能力を越えて，早口で話してこられると，英語なりフランス語なり，相手の知っている言葉に切り換えなくてはならないが……。さて，われわれのトラクターは動き出した。荷台には村人のいく人かが乗っている。番人の長や，警官らしき人は，いわば公務であるが，関係のないヒマ人の男が乗り込んでいる。ナイル河岸の耕作土地域にある村から，砂っぽい土の灌木地帯を過ぎると砂漠になる。その砂の海の彼方に岩壁がそそり立っている。岩山のふもとの番人小屋で，トラクターを下り，歩きにくい砂を登って行くと，岩壁の中腹の各所に岩窟墓の口があいているのである。6基の内，2基が古王国末期，4基が中王国のこ

第3図　メイルの岩窟墓内部



第4図　センウォスレ一世のキオスク（小聖堂）

の地方（上エジプト第14州）の君侯の奥津城である。壁画や刻文の保存状態はかなり良い。見学後，番人小屋で，昼食をとった。メイルの人々は独特の甘い紅茶をふるまってくれた。

中王国の遺跡としては，テーベのカルナック神殿の一画に復元されたセンウォスレ一世のキオスクも印象的であった。この第12王朝第2代の王のセド祭（即位30年祭）に使われたらしいこの遺構の石材は，すべて後の王によってカルナック神殿の塔門の内部の石材として解体転用されていたものであったのが，塔門の修理の際に発見されて，再建されたのである。これは完形の建築遺構としては第12王朝で唯一のものである。

筆者はエジプト学を専攻しているとはいいながら，専ら中王国前後の言語・文学を研究しているに過ぎない。その意味で，中エジプトの岩窟墓とそれを取りまく風景や，文学の黄金時代の王の建築遺構をこの目で見られたことは，文学の理解に風土からの観点を加えることが出来たのではないかと思う。時間的にも空間的にもかけ離れた古代エジプト文学を研究する者にとって，それが生まれた風土を知ることは，基本的な条件であるという実感を得たのであった。猛スピードで走るタクシーの窓から，目をこらして探し求めていたのは，パピルスに書かれた文学作品の背景であった。

（小山雅人＝当センター調査課調査員）

「葉　椀」「葉　皿」考

伊　野　近　富

「葉椀」「葉皿」という興趣ある語が，『延喜式』巻七の大嘗祭の条などに出ている。素朴な解釈としては，木の葉を利用した椀・皿が考えられようが，次の解釈としては木の葉に似た色合いの容器が考えられよう。後者の考え方が正しいとすれば，緑色の容器がこれに相当するだろう。このように考えていくと平安時代（特に10世紀代）の緑釉陶器が第1候補に上がってくる。「葉椀」「葉皿」＝緑釉陶器という関係を明らかにすることが小文の目的である。なお目的を達成していく中で明らかとなった祭祀具（特に食器類）の使い方についても分析したい。位階の差が食器に反映する事実を認識すれば，祭祀に係わる考古資料を整理することができるだろう。

平安時代中期に編さんされた『和名類聚抄』では，「葉椀」「葉皿」は祭祀具の項に入れられている。そして前者をクボテ，後者をヒラテと呼んでいる。この具体例として『延喜式』巻七 大嘗祭がある。

(1) 凡 供二神 御一雑 物 者。大 膳 職 所レ備。多 加 須 伎 八 十 枚。（中　略）
並 居二葉 椀（クボテ）一久音旦。覆 以二笠 形 葉 盤（ヒラテヅ）一。比良旦。似二笠形。木 綿一結 垂 装 飾レリ。
（史料番号は筆者）

大嘗祭とは，天皇が即位した後はじめて行う新嘗祭のことであり，悠紀殿や主基殿を設けて新米を天地の神に供える重要な儀式であった。いわば天皇を頂点とする体制維持のためのセレモニーであった。

この条によると，高杯などの他葉椀や葉皿が使用されており，使用方法としては笠形をした葉皿を葉椀の蓋としていたようである。

更に具体的な使用例として『延喜式』巻三十五 大炊寮がある。

(2) 新 嘗 祭 料
宴 会 雑 給
親 王 三 位 以 上。四 位 参 議。別 米 一 升 二 合。命婦三位以上同之。自餘。諸節亦同。四 位。五 位 并 内 命 婦。大 歌 別 八 合。笛 工。国 栖 別 二 升。其 飯 器 参 議 已 上 並 朱 漆 椀。五 位 以 上 葉 椀。命 婦 三 位 以 上 藺 笥レ加宮。五 位 以 上 命 婦「並」陶 椀。レ加盤。大 歌。立 歌。国 栖。笛 工 並 葉 椀。五月五日青柏。七月廿五日荷葉，余節干柏。

これによると，葉椀は飯椀であることがわかる。また位階等により使用が規定されたこともわかる。すなわち朱漆椀は参議以上。藺笥は命婦三位以上。葉椀は五位以上および大

歌，立歌，国栖，笛工。陶椀は五位以上の命婦である。朱漆椀は朱色の漆を塗った木製の椀で，『延喜式』巻十七 内匠寮の朱漆器の条を参照すると径八寸(飯椀と記載されている)であったらしい。藺笥はイグサで製作されたものと思われる。『延喜式』巻二十四 主計上を参照すると径六寸，深さ五寸であったらしい。径に比してかなり深い器である。陶椀はおそらく須恵器椀と思われる。

これを整理してみると葉椀は焼き物であることが認められる。つまり，飯椀以下の文では参議以上朱漆椀（植物質），五位以上葉椀（？）という関係と，命婦三位以上藺笥（植物質），五位以上命婦陶椀（焼き物）という関係が認められる。したがって葉椀は焼き物である可能性が高い。

では焼き物の飯椀は上記の葉椀，陶椀の他に何があるのだろう。『延喜式』大炊寮の春日祭料，平野祭料，園韓神祭料，大原野祭料をみてみると土椀と鋺形の２種が認められる。使用量は平野祭の場合（土椀夏七十合，鋺形夏六十口）以外は鋺形が２倍程度多く使用されている。

整理してみると焼き物の飯椀には葉椀，陶椀，土椀，鋺形があり，使用の際には一定の規定があったことがわかる。すなわちもっとも上位の者が使用する場合が葉椀で，もっとも下位の者が使用する場合が鋺形である。

鋺形が土師器であったことは，『延喜式』巻二十四 主計上に，「土師器一丁……贄土師鋺形五十口。径六寸」の記事で確認できる。また土椀については確定できないが，10世紀前後の容器の中では黒色土器Ａ類（内黒）がもっとも可能性が高い。以上『延喜式』大炊寮にみられる焼き物は葉椀―？，陶椀―須恵器椀，土椀―黒色土器Ａ類，鋺形―土師器椀と対応することがわかる。したがって葉椀は灰釉陶器か緑釉陶器かに限定できるだろう。

この考えは次の史料で補足できる。『延喜式』巻三十九 内膳司では，

(3) 供 御 料 雑 器

（中　略）

金 銀 朱 漆 瓷 雑 器

つまり，内膳司で使用される雑器には金，銀，朱漆，瓷という種類があったのである。この後者の序列である朱漆，瓷は，資料(2)にある朱漆椀，葉椀と対応する。したがって瓷は葉椀であるという関係が抽出できよう。瓷が緑釉陶器や灰釉陶器であるということは楢崎彰一氏ら先学の説くところであり，このことからも葉椀が緑釉陶器か灰釉陶器である可能性が高いと言えよう。

ところで，10世紀前後の灰釉陶器や緑釉陶器の椀・皿類は花文をあしらったものが多い。ヘラで陰刻したものだが，この容器こそ葉椀と呼ばれていたのではなかろうか。『延喜式』

大炊寮の新嘗祭と同様の記事は，大膳上にある。そこでは三位以上が朱漆（椀），五位以上が烏漆（椀）と書かれてある。つまり葉椀ではなく，烏漆（黒漆椀）を使用せよと書かれている。なぜこのような違いが出てきたのかというと，大膳上がより古い形態の新嘗祭を記し，大炊寮の場合が『延喜式』編さん時に近い頃（より新しい形態）の有様を記してあるからだと考える。なぜならば，大膳上の「園韓神祭」の条を見てみると，「片埦」「窪坏」「平坏」というように器種構成が豊富であるのに対し，大炊寮の「園韓神祭」では「土埦」と「鋺形」の2種しか使われていないからである。一般的に奈良時代から平安時代にかけては，器種が豊富であるのが古相で，簡略化されるのが新相であるのが考古学成果によって知られており，したがって大炊寮の場合が新相であるのは疑いない。大炊寮の土器セットより簡略化されたものは他になく，この記事がもっとも『延喜式』編さん時に近いと言えよう。つまり「葉椀」という用語は10世紀前後に使用され始めたと考え得るのである。この事実と灰釉，緑釉陶器に花文（草花と言った方が妥当）をあしらうものが出現し盛行する事実はよく符合している。

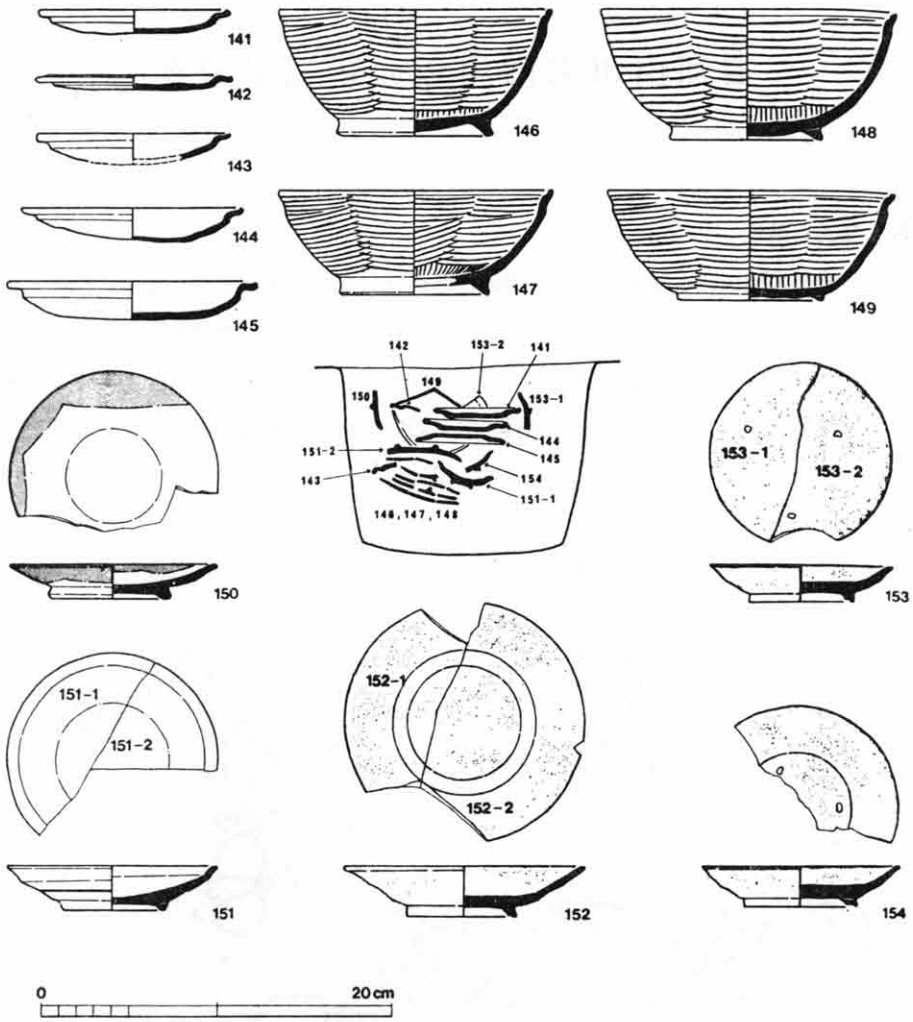
以上のように葉椀，葉皿は緑釉陶器や灰釉陶器を意味することがわかった。更にいずれかの焼き物に限定していたかどうかを考えてゆかねばならないが，決め手がないので今回は保留しておく。

次に，史料を見てゆく中で，祭祀（宴会の場合を含む）を行う際，位階の差によって使用される容器がかわっている事実に注目したい。

考古資料の中には祭祀遺跡や遺構として考えられている事例が少なくない。しかしそれにもかかわらず内容は不明の場合が多い。今回はピットに埋納された遺物群が，ある祭祀に使用された容器として考え，その実体を解明したい。

事例，平安京右京一条三坊十町（京都府立山城高校敷地内）遺跡，土壙ＳＫ178。

土壙ＳＫ178は，杉山信三氏の条坊復原案によれば馬代小路の中央部に位置し，十町の北側を走る鷹司小路南築地心から約30m（10丈）の地点に相当する。径約0.3m，深さ約0.23m。埋土は上下2層に分かれ，上層（暗褐色粘質土層）にのみ遺物が埋納されていた。遺物は土師器皿5，黒色土器椀4，緑釉陶器皿3，灰釉陶器皿2であった。土師器皿の編年によれば11世紀前後の資料と言えよう。祭祀の内容については出土地点を考慮し，地鎮祭として把握しておきたい。この祭祀行為には少なくとも4人（内1人がカミである可能性もある）が関係している。飯椀である黒色土器が4点出土しているからである。しかし他の器種をみてみると，土師器皿が5点であるし，緑色の皿も5点であることから，椀1に対して皿がそれぞれ1がセットとなっていたと考えられる。この場合椀1が不足しているが，これは腐朽しやすい木製の椀がかって使用されたと推定しておきたい。したがって，



第１図　土壙ＳＫ178出土遺物（参考文献より）

ここで認められる祭祀は，木製の椀を使う者１と黒色土器椀を使う者４によって行われたと推定できよう。

『延喜式』が実際にどのように施行されたのかは不明だが，ともかく平安時代に於いては祭祀が重要な位置を占めていたことは文献からも類推できよう。建物を建てる時や解体する時などの地鎮祭では，使用した物を土壙に埋納する場合が多かったと思われ，今後類似した資料を集めることによって，祭祀執行者の位階にまで言及できることを確信している。

（伊野近富＝当センター調査課調査員）

〈参　考　文　献〉

平良泰久ほか「平安京跡（右京一条三坊九・十町）昭和55年度発掘調査概要」（『埋蔵文化財発掘調査概報1981』京都府教育委員会）

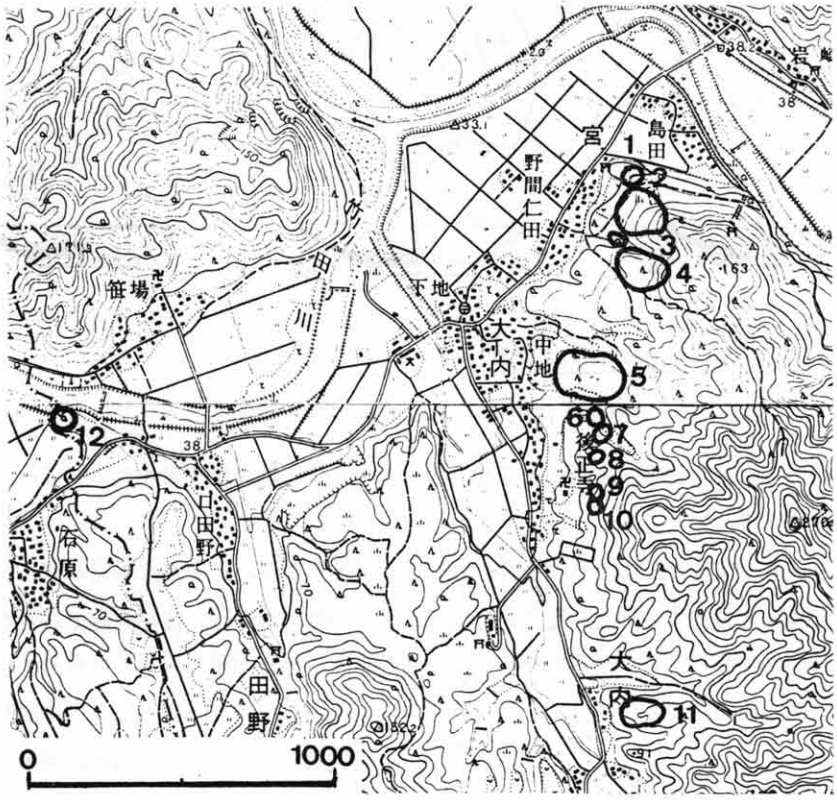
福知山市大内周辺の新発見遺跡

岩松　保

1. 経過と環境

京都府遺跡地図には，福知山市大内周辺の遺跡として大内城跡・奥谷遺跡や姫塚・男塚古墳をはじめとする多くの古墳が掲げられている。同地域では近畿自動車道舞鶴線の建設計画がなされてから，その事前調査として宮遺跡・城ノ尾古墳・大内城跡・後青寺跡・後青寺古墳の発掘調査が行われた。今回報告するのは，路線計画敷地内で新しく発見した遺跡である。現地踏査は，昭和57年6月3日，同15日の二日間で，当センター調査員の伊野・岩松・藤原の三名が従事した。

福知山市大内（第1図）は，国鉄福知山駅の南東約6㎞のところに位置し，竹田川と土



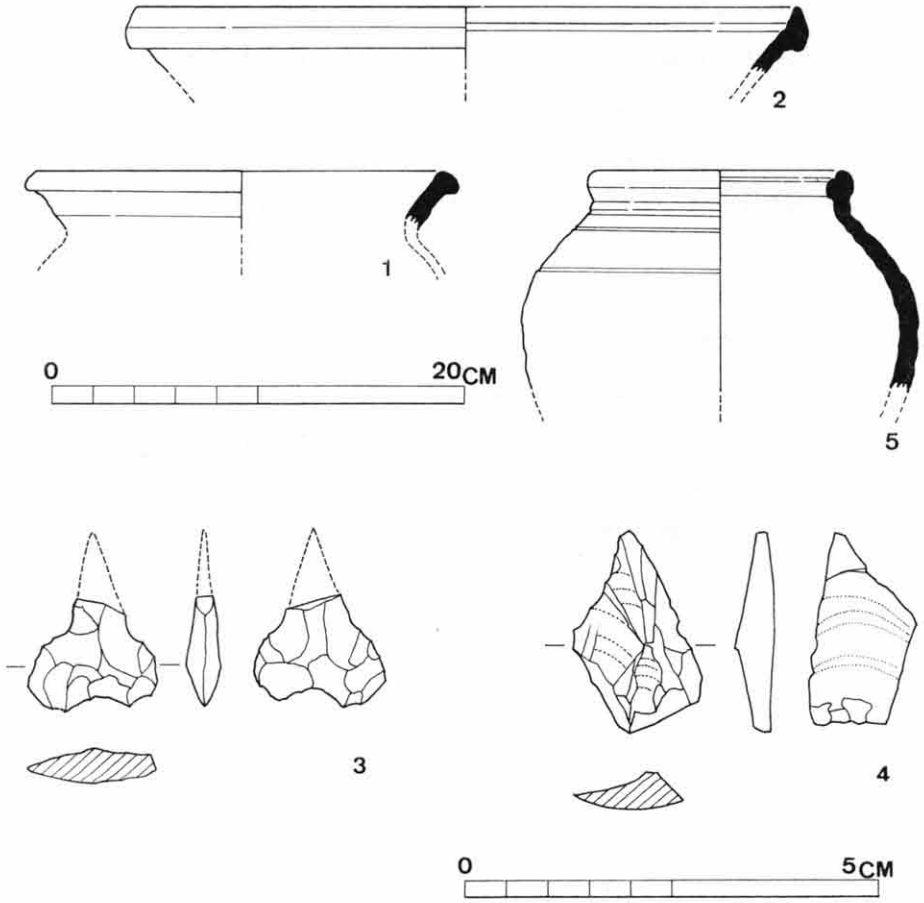
第1図　遺跡分布図　1. 城ノ尾城館跡　2. 宮遺跡　3. 城ノ尾古墳　4. ケシケ谷城館跡　5. 大内城跡　6. 後正寺古墓　7. 後青寺跡　8. 洞楽寺3号墳　9. 洞楽寺2号墳　10. 洞楽寺古墳　11. 山田館跡　12. 福岡城跡

師川が合流する地点のやや南側，東西から山がせまってくるあたりに開けた集落である。集落の東側，竹田川右岸の標高60～70mの山腹に道路の建設が予定されている。このあたりは山から伸びた尾根が平野に張り出し，尾根と谷が複雑に入り組んだ地形となっている。

2. 遺跡紹介

踏査により，それらの尾根上で南から洞楽寺２号墳・３号墳，ケシケ谷城館跡，城ノ尾城館跡が発見された。以下，その概要を説明してゆきたい。

洞楽寺２号墳・３号墳は，洞楽寺の裏山にある洞楽寺古墳に近接して見つかった。地番は福知山市大字大内小字坪田である。２号墳は洞楽寺古墳と同じ尾根上の北側に近接して造られている。径約６m，高さ0.2～0.5mの円墳である。３号墳は，それらと谷で隔てられた北側の尾根上にあり，２号墳とほぼ同規模の円墳である。いずれの古墳も尾根の先端部に造られており，ここからの見晴らしは共に良い。



第2図 表採遺物実測図

ケシケ谷城館跡は，福知山市大字宮小字ケシケ谷にあり，宮遺跡の南側の尾根上に位置している。この尾根の先端には男塚古墳（前方後円墳）・姫塚古墳があり，両古墳から約100m，山に入りこんだところにある。遺跡はわずかに傾斜する四段の平坦面からなり，最高所の平坦地がもっとも広く，東西長約50mで，下の三段の平坦地はすべてを合わせて東西長約40mである。土塁や空堀の跡などは認められなかったが，最下段の平坦面の縁辺から鍋の破片1点（第2図-1），男塚古墳の墳頂から須恵器ねり鉢口縁部片1点（第2図-2），土師器片1点，男塚古墳の南東約30mの地点から石鏃1点（第2図-3）を表採した。鍋は内外面とも茶褐色をしており，堅く焼き締められている。復元口径19.6cmである。ねり鉢は，復元口径32cmをはかり，黄灰色を呈している。共に鎌倉時代のものと思われる。これらの遺物と遺跡の立地から，中世城館跡と推定した。石鏃は一部破損しており，黒灰色のチャート製である。

城ノ尾城館跡は一宮神社の裏山にあり，宮遺跡の北側に隣接している。長さ約60mにわたり，幅2～3m，高さ0,5～1mの土塁とその東側に幅約3m，深さ0.5～1mの空堀が残っている。約15mの平坦地をはさんで反対側に幅約5m，高さ1～1.5mの土手が南北に連なっており，その東側に現在道がつけられている。これらの土塁や空堀の存在から，約15m×60mの細長い範囲が中世城館跡と考えられる。この北側の緩やかな傾斜地より土師器片1点，陶器片1点，石刃1点（第2図-4）を発見した。石質はチャートで，黒灰色である。

以上，簡単ではあるが新発見の遺跡を紹介した。ケシケ谷城館跡・城ノ尾城館跡を中世に属するものと考えたが，今後の調査により歴史的な位置づけがなされるものと期待する。

最後に，大内より西側，京都府と兵庫県の境界に位置する福岡城跡で発見した土器を紹介しておく（第2図-5）。1mm程度の砂粒を多く含み，内面・断面とも黒灰色，外面は黄茶色である。復元口径12cmをはかる壺である。なお把手が付けられていた痕跡があるが，復元はできない。丹波古陶館の大槻 伸氏によると，江戸時代初頭頃の丹波焼であるとのことである。

（岩松　保＝当センター調査課調査員）

昭和57年度発掘調査略報

1. 美濃山狐谷横穴群（第2次）

所在地　八幡市美濃山狐谷

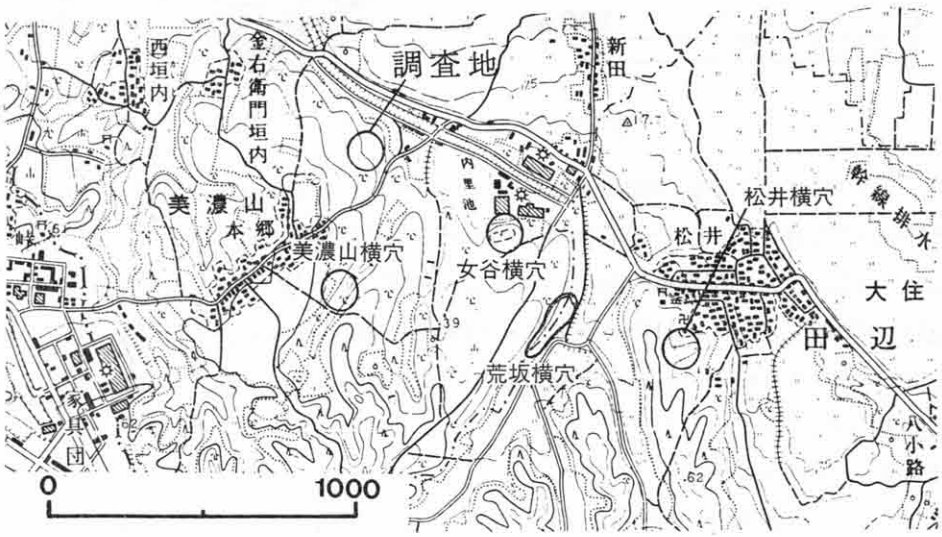
調査面積　約6,000㎡

調査期間　昭和57年5月14日～7月17日

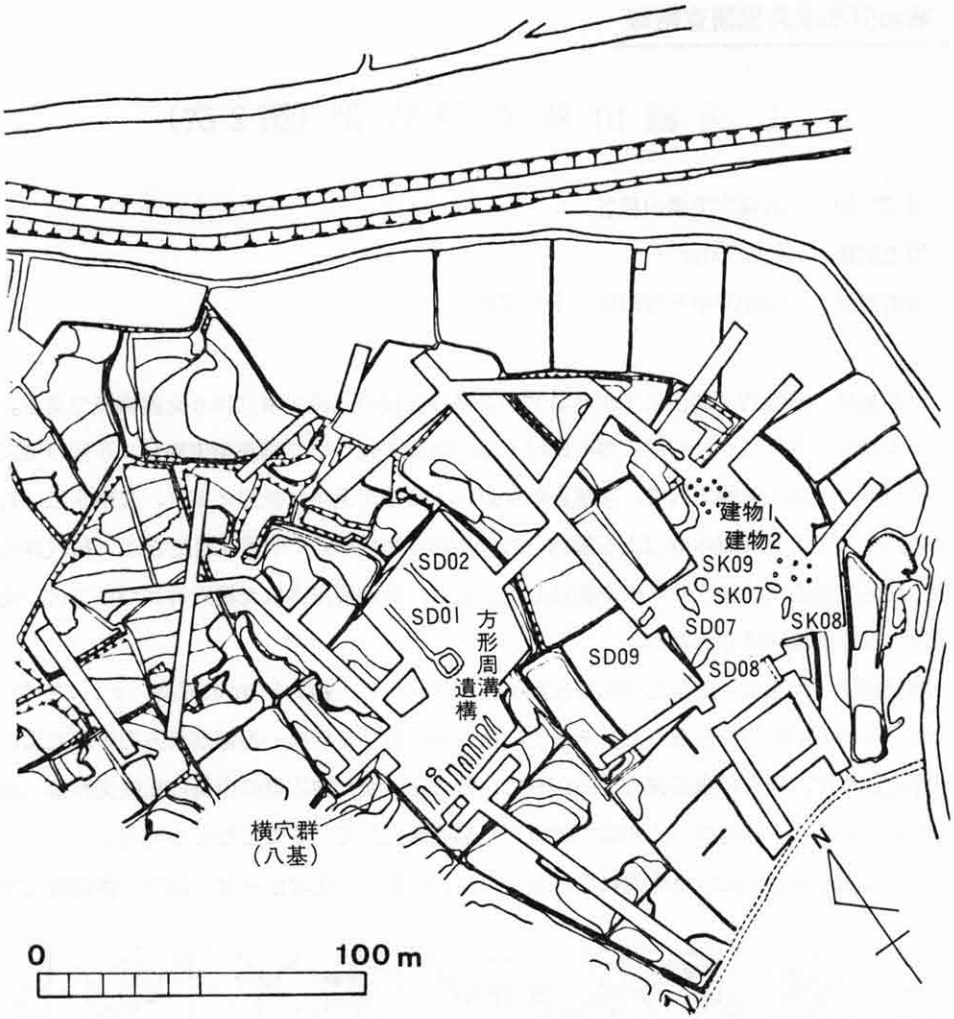
はじめに　八幡市美濃山に予定されている新設高校の建設工事に伴う発掘調査である。今年1月から3月にかけて横穴群の地区（約2,000㎡）について調査を実施し，8基の横穴を検出した。出土遺物として，須恵器80余点，土師器20余点，鉄刀2振り，金環4点，鉄鏃2点そして人骨15個体分以上を確認した（本誌4号参照）。今回の調査では，横穴群を除く地区を対象に，約6,000㎡を発掘した。なお，前回検出された横穴群については，全面的な保存措置が講じられた。

調査概要　調査は，対象地である丘陵斜面（竹林）に，幅約4.5mの細長いトレンチを入れ，当地の旧地形を確認した。そして，横穴の位置する斜面の谷部が東方約40mで北に向きをかえて，現在の水田部分で広がっていること，また横穴群の南側の丘陵支脈は，先述の谷に沿うように延び，その端で広い平坦部を形成していることなどが判明した。

今回の調査としては，全体的にまとまった遺構を検出しえなかった。以下，各遺構につ



第1図　調査地位置図



第2図　調　査　地　位　置　図

いて概略を述べると，方形周溝北拡張区では，ＳＤ01から古墳時代後期以降の土器片少量，ＳＤ02から古墳時代の土器・円筒埴輪片を中心に，平安初頭にかけての土師器片等が出土した。横穴群の東方約120mの丘陵端平坦面では，ＳＤ03・ＳＤ04から古墳時代後期以降の遺物，ＳＤ07・ＳＤ08・ＳＤ09・ＳＫ07・ＳＫ08・ＳＫ09からは，弥生時代中期の土器片が出土した。またＳＫ08の東南約10mの地点では円筒埴輪片が表土中より出土した。

小結　横穴の調査に継続して実施した今回の調査については，遺物等の整理も始まったばかりであり，詳細は後日にゆずることとする。ともかく，全体として各遺構とも遺存状態が悪く，また各所に削平を受けており，性格を確定する手がかりに乏しいものであった。

（久保田 健士，黒坪 一樹）

2. 篠・西長尾奥第1窯跡

所 在 地　亀岡市篠町王子西長尾1-26

調査期間　昭和57年5月10日～6月22日

調査面積　200m²

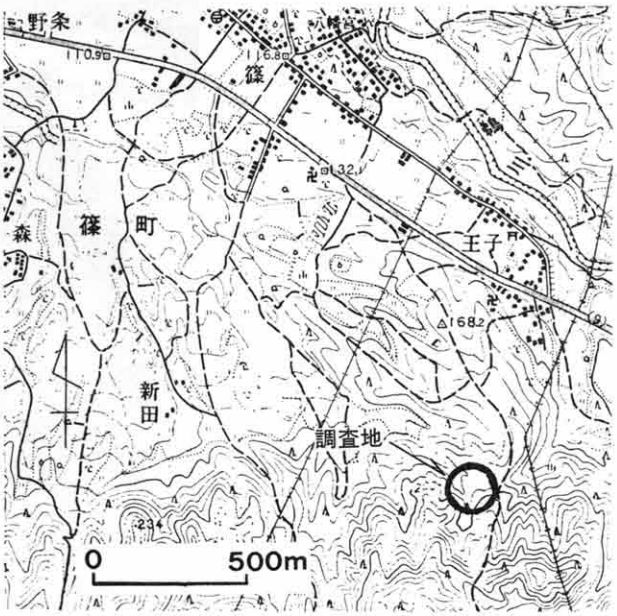
調査概要　調査地は標高約180mで，篠窯跡群のうちでも最も高所に位置するものの一つである。東西方向の狭く浅い谷の北側および南側斜面をその範囲とする。昭和53年度の試掘調査により，谷筋から多量の遺物が出土し，南側斜面崩壊部に灰原断面が確認されている。

調査地に5本のトレンチを設定して掘削した結果，窯体は検出されなかったが，北側斜面に窯体の痕跡とみられる焼土を確認した。また，南側斜面の灰原は，その一部が残存しているにすぎなかった。灰原は，その堆積状況から，1基の窯のものとみられ，また，遺物整理の段階で，北側斜面の焼土出土土器と南側斜面の灰原出土土器が接合でき，焼土と灰原が一連のものであることが判明した。

出土遺物は，すべて須恵器で蓋・杯・高台付杯・皿がそのほとんどを占める。蓋のなかには，環状のつまみをもつものがある。他に薬壺・高杯脚部・不明獣脚などが含まれる。これらの土器は8世紀後半のものとしてとらえられよう。

以上のことから，西長尾奥第1窯跡は8世紀後半頃に操業しており，操業が終了して以後，土砂崩れによって窯体および灰原の大部分が流出して谷状の現地形になったものとみられる。

（引原 茂治）



第1図 調 査 地 位 置 図

3. 篠・黒岩窯状遺構

第1図　調査地位置図
(1/50,000)

所在地　亀岡市篠町篠黒岩1-20

調査期間　昭和57年6月23日～8月31日

調査面積　200m²

調査概要　今回の調査地は，昭和54・55年度に調査された小柳窯跡群東側に隣接する尾根上緩斜面に位置する。斜面に沿って1～5までのトレンチを設定して掘削した。そのうち3トレンチで窯壁の一部を，4トレンチで焼土を確認したので，その周辺を拡張して窯体を検出した。

この窯体は，南北方向に主軸をもち，北側が焚口部となっている。残存状況は悪く，南側煙道部および西側窯壁はほとんど残っていない。規模は，全長約2.8m・幅約1.3mを測る。床面傾斜角度は約13度である。砲弾形の平面形をもつ平窯とみられる。また，床面の焼け方からみると，焚口が2か所あった可能性もある。床面には丸太の痕が残る。なお，この窯体に伴う遺物は全くなく，その埋土から須恵器の小片が1片出土したのみである。この窯に伴う灰原も存在しなかった。したがって，この窯の性格・年代については現時点では不明である。この窯に類似するものとして，小柳3号窯がある。平面形・床面および壁面の焼け方・明確な遺物を伴わない点などが共通する。この小柳3号窯もその性格は不明である。窯体の掘削終了後，工房跡などを確認する目的で周囲を掘削したが，それに関係する遺構・遺物は検出されなかった。

（引原 茂治）

第2図　窯体全景（北から）

4. 太　田　遺　跡

所 在 地　亀岡市薭田野町小字太田

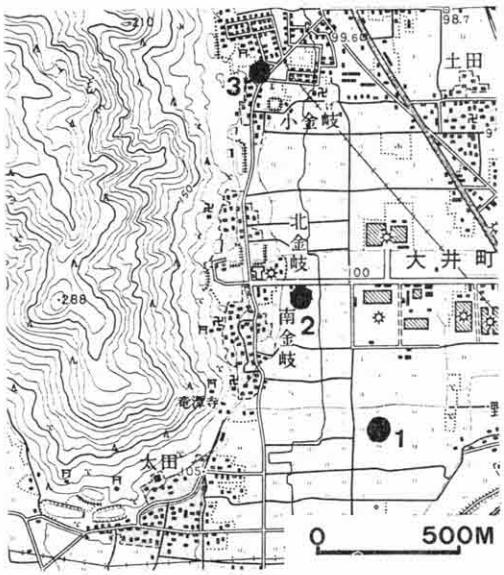
調査期間　昭和57年5月4日～9月30日（予定）

調査面積　約2,000m²

はじめに　昨年度，亀岡市薭田野町太田地区において国道9号線バイパス敷設工事に伴う調査として桑田郡条里跡の発掘調査を行った。その際，道路予定地内に設定したトレンチ下層より多量の弥生式土器の出土をみたため，今回は下層の遺物の包含状況ならびに遺構の有無を確認する目的で調査を継続することとなった。遺跡名は小字名を冠して太田遺跡とした。

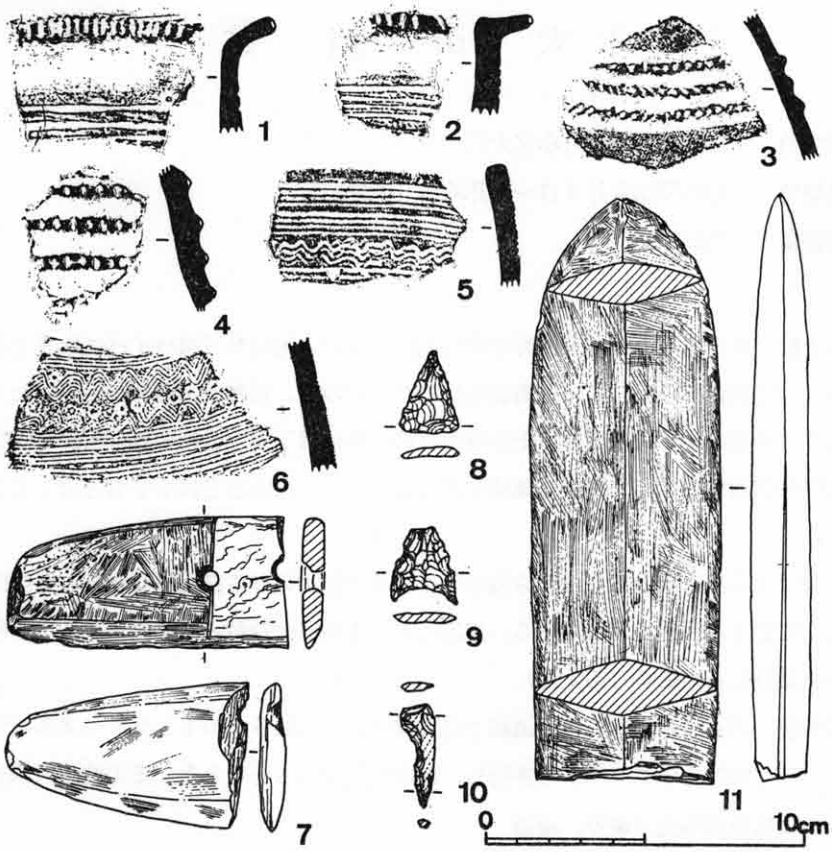
遺跡は，大井川右岸の行省山から南東へとゆるやかにのびる標高100mほどの丘陵縁辺に位置しており，現状は水田である。周辺には弥生時代の遺跡として知られる南金岐遺跡，馬場ケ崎遺跡などがある（第1図）。

調査概要　調査にあたっては，道路予定方向に沿って幅3mのトレンチを2本設定するとともに，3m四方のグリッドを併用し，随時拡張することとした。その結果，調査地は小規模の舌状地形の上に載り，遺物包含層はほぼこの地形に符合したひろがりをみせることが判明した。層序は，耕作土，床土の下に黒色粘質土があり，暗褐色の間層をなして地山に至るのが基本的である。遺物は弥生時代前期から中期初頭のものが多く，主に黒色粘質土中層から上層に集中してみられた（第2図）。



第1図　調　査　地　位　置　図
1. 調査地　2. 南金岐遺跡　3. 馬場ケ崎遺跡

これまでに，弥生時代の土壙30数基，ピット多数，溝状遺構及び近世から近代の溝などの遺構が確認されている。そのほとんどは地山上面で検出されているが，土壙の一部については黒色粘質土中層での検出に成



第2図　太田遺跡包含層出土遺物

功している。

土壙は舌状地形の縁辺に広範囲にわたって分布しており，円形と長楕円形のものとがある。長さ2m，幅1mが平均的規模である。壙内には少量ながら炭，土器片が普遍的にみられ，骨片，櫛状の木製品などを出土するものもある。土器は甕の占める割合が多く，口縁に刻目，頸部に多条の沈線を施しており，畿内第1様式の特徴を良くとどめている。ピット，溝状遺構，その他の遺構からの遺物の出土は顕著ではなく，性格は明らかではない。

調査はなお継続中であり，全体を把握するには至っていないが，これまでに上述のような多数の遺構，遺物が検出された。なかでも，30基を越え，今後もその数の増加が推定される土壙の存在は注目に値するものである。

当地方において，弥生時代前期から中期初頭の資料は，これまで皆無に近かった。今回の調査で確実に得られつつある資料は，当地方の歴史的空白を埋めるものである。今後の資料の増加に期待したい。　　（田代　弘）

5. 土　師　南　遺　跡

所 在 地　福知山市字土師南町650

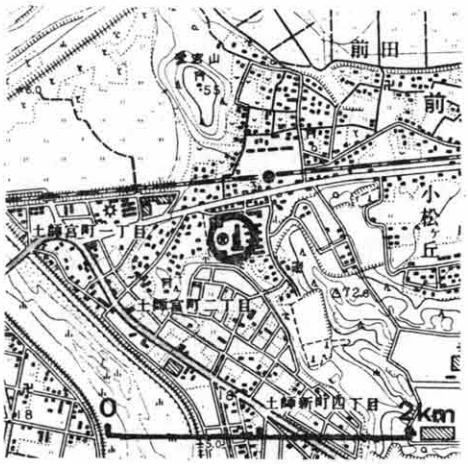
調査期間　昭和57年7月1日～7月9日

調査面積　400m²

はじめに　京都府教育委員会は，昭和57年度に府立福知山高等学校の校舎老朽化に伴い，新校舎の増改築工事を計画した。当校敷地内からはこれまでに土師器片・須恵器片等が採集されており，何らかの遺構が存在しているものと予想されることから，各関係機関と協議の結果，事前に発掘調査を実施することになった。

今回の発掘調査は，前年度の発掘調査に続くものであり，前年度調査地の北20mの地点で実施した。前年度の調査では，学校用地造成当時に大規模な丘陵削平が行われていたことが判明している。

調査概要　発掘調査予定地内に幅3m，長さ10m前後のトレンチを5か所に設定し，発掘調査を実施した。その結果，調査地は削平を受けておらず，地山の形状は舌状に北方へのびる丘陵と谷地形を示しており，盛土により整地されていた。調査地東部では地表下1.2mで地山面（白灰色砂質土）が認められ，中央部及び西部にかけては地表下3m程度で地山に達した。地山の傾斜は北方へ急傾斜していた。出土遺物として土師器，須恵器片及び染付が出土したが，遺構は検出できなかった。



第1図　調　査　地　位　置　図

まとめ　調査の結果，調査は丘陵斜面の発掘となり旧地形の形状を確認したのにとどまった。出土遺物から，付近に遺跡が存在することは確実であるが，残念ながら遺跡の性格を把握することはできなかった。調査地の西方に平坦な丘陵地が存在することから，その地に遺跡の中心が存在する可能性がある。

（竹原　一彦）

6. 長岡京跡（立会調査）

所在地　乙訓郡大山崎町円明寺，長岡京市今里他

調査期間　昭和57年4月1日～7月17日

調査面積　約1,780m²

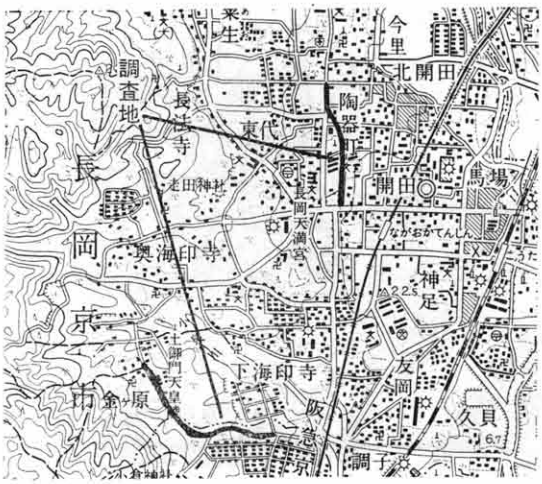
調査概要　今回の調査は，長岡京市及び乙訓郡大山崎町において電話線埋設工事を行うに際して，当該地が長岡京跡の一画にあたるため実施したものである。調査は，工事の性格上調査幅が極めて狭小であるため，立会調査とし主に土層観察と遺構，遺物の有無の確認に努めた。以下今里地区，円明寺地区にわけてその概略を述べたい。

今里地区は，長岡京跡右京四条三坊，同五条三坊の推定地にあたる。調査の結果断面から，いくつかの「落ち込み」を確認した。この落ち込みは，主に地表下0.6～1.0m付近に黄褐色粘質土を切り込んで形成されていた。なおこれらの落ち込みの形状，規模，性格の詳細については，調査の性格上断面による観察しか行えず，明らかにし得ない。ただそれぞれの落ち込みから検出した遺物が，奈良末から長岡・平安期に属するものが多いことは，長岡京の条坊を考える上で興味深い。

円明寺地区は，向日丘陵の東麓の微高地にあり，長岡京右京八条四坊が推定される位置にある。調査の結果なんら明確な遺構は検出されず，出土した遺物もきわめて少ない。ただ一片のみ採取したチャートの剝片は，近くに下海印寺遺跡があることを考えれば，その関係が注目される。

今回の調査では，多くの遺構，遺物を検出採取したが，立会調査という限定された調査ということもあり，その性格，規模，そして両者の関係については，今一つ明らかにできない。ただ今後周辺で調査が実施される際にこの調査の結果が一資料として活用されれば幸いである。

（山下　正）



第1図　調査地位置図（1/50,000）

第1回 「小さな展覧会」を終わって

当調査研究センターでは，京都府教育委員会の後援により去る7月17日から31日までの日曜日を除いた13日間，昭和56年度中に発掘調査を実施した成果を公開する「小さな展覧会」を開催した。期間中の見学者が300名を越すという盛況振りであったことは，第2回以降へのはげましになる。

文化財保護に対する一般の認識について言えば，歴史的な美術工芸・建造物等の有形文化財に対する関心は高いが，こと埋蔵文化財に対しての関心は決して高いとは言えないのが実情である。こうしたことから，今回の展覧会に一般の方がたが多数見学に来られたことは，埋蔵文化財の啓蒙の一助を担ったものと，大変うれしく思う。

今回の展覧会は，当調査研究センターの資料室で仮設の展示台を置いて，じかに出土遺物を展示したので，普通の展覧会でガラス越しに見ることに比べれば，詳しい部分を見ていただくことができ，特に研究者にとっては有意義なことであったと思う。

埋蔵文化財が急速に破壊されている現状において，すべての人びとが文化財を愛し，特に価値を理解して愛するという精神を養うこと，その為に実物を実際に見聞し，体感してもらうことが必要で，この展覧会もこの点に重きをおき，今後毎年継続して開催すべきであると考える。また展覧会を見学に来られた人びとの中には，埋蔵文化財とあまり関わりのない方も多く，「どの様に発掘されたのか」「これは何ですか」「生活にどのように使

会　場　風　景

用されたのか」など素朴な質問を耳にしたが，全体的に説明不足で専門的用語が多く，解りにくい展示であったのではないかと反省もしている。

埋蔵文化財の発掘調査は，その地域の多くの人びとの社会の理解・協力・支持があってはじめて可能であり，考古学研究の進展および出土遺物の保護・活用も期待できるのではなかろうか。こうした意味から，この種の展覧会は，専門的知識のある人びとに焦点をあてるだけでなく，深い知識のない人びとに対しても十分に配慮し，解り易い解説を施こすとともに特に埋蔵文化財が開発等によって消滅しつつある状況や，破壊されていく実態と，保存することの重要性についての説明が必要であると思う。

「小さな展覧会」も回を重ねるごとに充実させていかねばならないが，会場・照明・展示方法等々改善していく必要があろう。さらにこの展覧会に対して，府下の各地で発掘調査された遺跡の紹介と，関連遺物の展示について関係機関の協力が得られれば，さらに充実した展示ができるものと思う。

最後に，発掘調査によって検出される遺構・遺物については，現地説明会の開催や発掘調査報告書の刊行など尨大な資料があるが，それらの保護，活用がどのように行われているかということを行政発掘重点に，当調査研究センターに籍を置いた者として学習していきたいと思う。

（長関　和男）

府下遺跡紹介

7. 神　明　山　古　墳

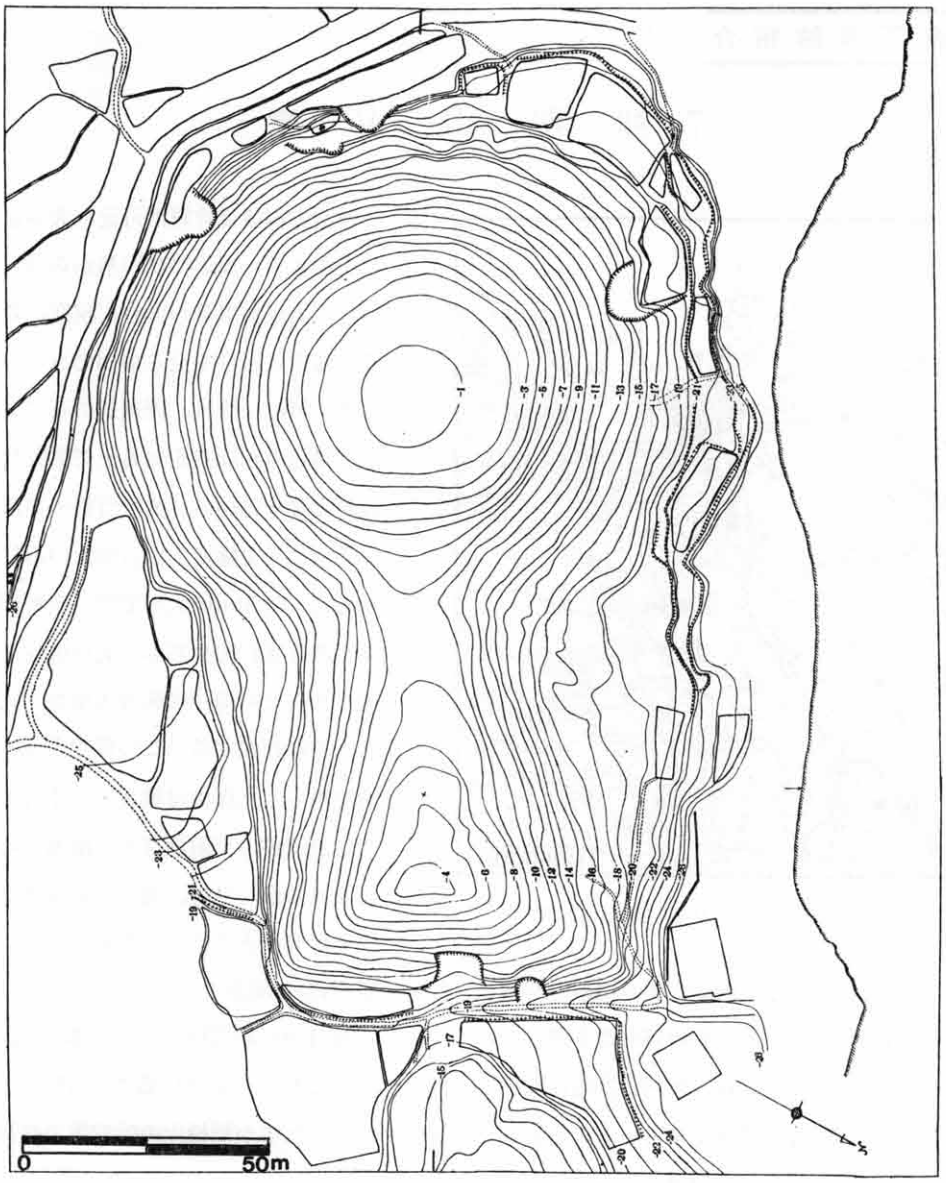
第1図　神明山古墳位置図

神明山古墳は竹野郡丹後町大字宮に所在する。周辺には13基から形成される大成古墳群があり，現在，3基の横穴式石室を見る事ができる。各々，無袖，片袖，両袖式の石室で，石室構造の相違点を知る上で貴重な資料となっている。又，竹野の集落の手前に「史跡産土山古墳」の石柱がある。径50mの大円墳で，昭和13年に調査され昭和32年に史跡指定に至った。その他，願興寺古墳群，大林古墳等存在する。この様な大型古墳が集中した理由は縄文・弥生時代の竹野遺跡，平遺跡等との関連が考えられるが，一方，海洋との関連も重要な要素と考える事が出来る。

本古墳は東北から西南に渡る尾根を切断し（丘尾切断形式），築造された前方後円墳で，周囲は湿地であり，周濠の可能性が考えられる。墳丘規模は全長約190m，前方部の基底幅約78m，高さ約15m，後円部基底径約129m，高さ約26mである。くびれ部には円形の造出があり，三段築成を呈する。その段築各々に埴輪列があった事が埴輪片の採取等で推測される。又，斜面には円礫の葺石が露出している。

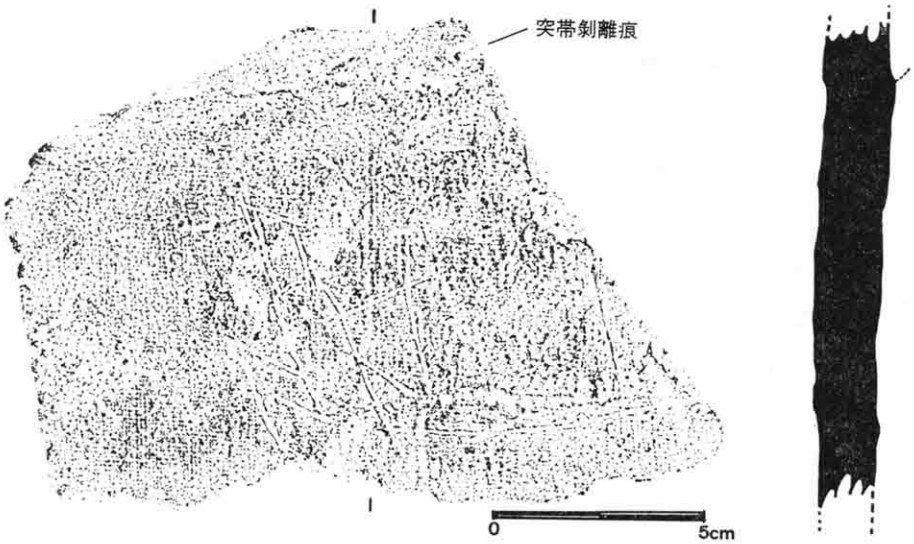
純粋に本古墳に関係した遺物は円筒埴輪，家屋埴輪，盾形埴輪，蓋形埴輪で，他に香盒坩形石製模造品の出土も伝えられるが詳細は不明である。埴輪の中で特に記述を要する物に箆描きの埴輪片があり，そこには舟を漕ぐ人物が描かれている。（見方によっては帆船とも思えるが……）偖て，この埴輪から当時の社会背景を考察する事は非常に重要である。

この周辺には大型古墳があり，竹野遺跡，平遺跡との関連で築造されたとは既に述べたが，ここで説得力に欠けるが一説を提起したい。瀬戸内沿岸には墳丘整備で著名な五色塚古墳をはじめ，興塚古墳等，海辺に30～40km毎に築造されており，それらの古墳は瀬戸内

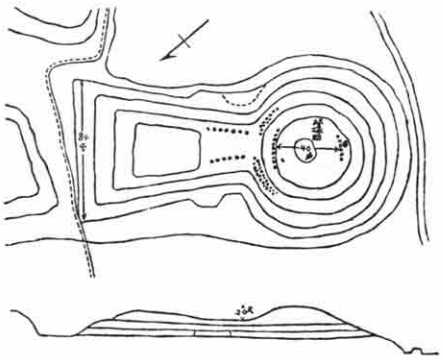


第2図　神　明　山　古　墳　墳　丘　測　量　図〔同志社考古，10号〕

沿岸に勢力を持った「海人族」の墓と解釈されている。又，貨泉の出土も海岸線に多く，出土地点が海岸線に隣接した所で交易の媒体としての意味を持つ遺物と考えられる。更に，文献では「応神紀」等に記事があり，瀬戸内を展望できる位置に古墳が多数存在する事も指摘できる。この様な観点から本古墳周辺を見ると，神明山古墳を出発点に久美浜方面にかけて，馬場ノ内古墳，宮の谷古墳，三津古墳，白滝古墳，城山古墳，相谷古墳，大泊古墳，大良古墳，エンザキ古墳，蒲井古墳がほぼ等間隔で存在する。又，その立地を見ても



第3図 神明山古墳出土埴輪拓影



第4図 埴輪列略図

瀬戸内沿岸と同様な条件が見受けられる。この2点のみで海人族の存在を推測する事は危険であるが，その裏付けとして，函石浜遺跡から出土した貨泉と第3図の篦描きの埴輪を考えたい。

この埴輪は円筒埴輪片で最上部にはタガの剝離痕があり，その下部3cmはナデ調整を施す。全体の調整は14条と9条のハケメで，篦描きの部分はナデ調整である。第3図(拓影)の左端はスカシ孔の断面を呈しており，長方形のスカシ孔を推測できる。又，人物の左手と思われる部分から篦描きを消した痕跡があり，工人が波しぶきを表現したものか，故意に篦描きを消したものか非常に興味深い。

本古墳を上述の如く解釈した上で年代を与えると，墳形から黒部銚子山古墳よりは古くなり，石製模造品の年代から古墳時代前期と考えるのが妥当であろう。いずれにせよ全長200mもある古墳を築造し得た人物は本古墳周辺一帯に君臨した有力豪族であったろうし，周辺を考える上で貴重な資料と言えよう。尚，第3図は網野高等学校，丹後郷土資料館の御配慮をいただいた。末尾ながら記して謝意を表したい。 (小池 寛)

(註：本古墳へは国鉄峰山駅から間人行きバスで間人迄行き，間人から経ケ岬行きで竹野下車すぐ)

『同志社考古7』同志社大学考古学研究会1969，梅原末治「神明山古墳」『京都府史蹟勝地調査会報告』1929，梅原末治「神明山古墳出土品」『京都府史蹟名勝天然紀念物調査報告』14 1933

8. カ　ザ　ハ　ヒ　古　墳

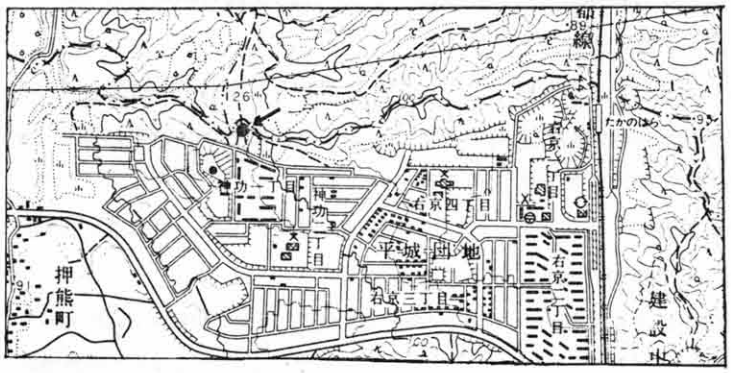
カザハヒ古墳は京都府相楽郡木津町大字相楽と奈良県奈良市山陵町の境界に位置する。近鉄京都線「高の原駅」で下車し，平城ニュータウンの最北端の道を西へ約15分，神功一丁目まで行き，雑木林に入ったところにある。本古墳の東方には瓦窯が点在し，南方には神功皇后陵で著名な佐紀古墳群がある。なお，京都府では「カザハヒ古墳」，奈良県では「石のカラト古墳」と呼称を異にする。

墳丘は第1段が南北13.75m，東西13.8mの方形で，第2段が径9.2mの円形を呈し，高さ2.9mの所謂「上円下方墳」である。葺石は第1段の残りが良く，第2段の裾との境，及び四隅を結ぶ対角線上とに水みち施設がある。その他の施設として墓前祭祀に関連がある礫敷，道底面のコロのための道板，加えて，墳丘下の暗渠等，特記すべき施設が数多くある。墳丘は版築技法による。

内部主体は，長さ2.6m，幅1m，高さ1mの横口式石室で，天井部は屋根型に0.1m刳りこむ。又，天井石と側壁の目地には灰白色粘土をつけて目張りを施す。

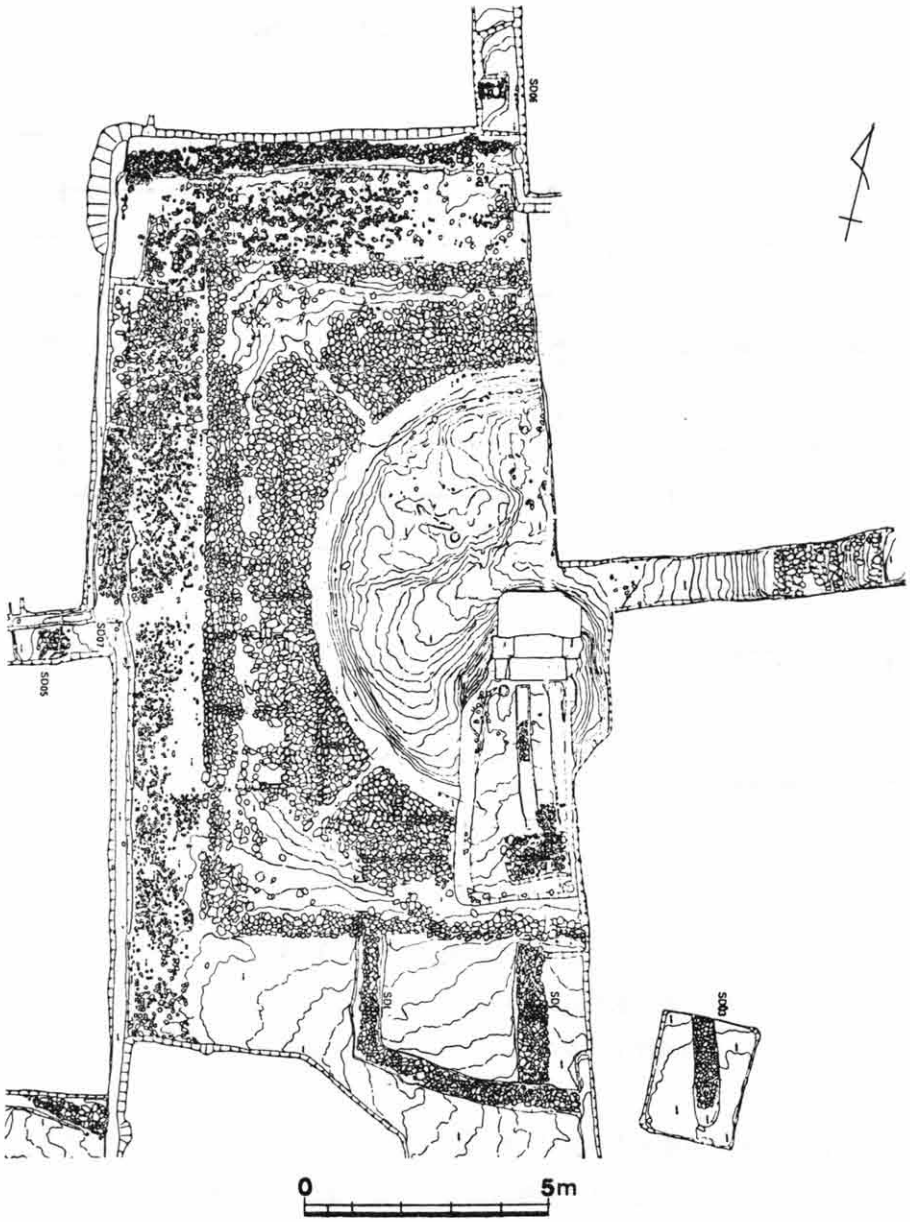
以上が調査に依って知り得た本古墳の概観であるが，六世紀末から七世紀にかけて築造された古墳を終末期古墳と考えると，本古墳も石室の形態，出土土器等から，その範疇に入る。ここで若干終末期古墳について記述したい。

終末期古墳は後期古墳から継続して築造された構造様式を踏襲している部分も当然あるが，所謂「飛鳥時代」の墳墓として考える方が妥当な部分も多数持ち合わせている。先ず，石室の顕著な例は，広島県尾市1号墳の十字形石槨，奈良県花山西古墳の磚槨墳等ある。これらの構造様式はバラエティーに富み，1型式の範疇のみで把握する事は不可能であろう。本古墳の場合，石室側壁，奥壁，天井石は切石で構築され，整然としている。



第1図　カザハヒ古墳位置図（1/25,000）

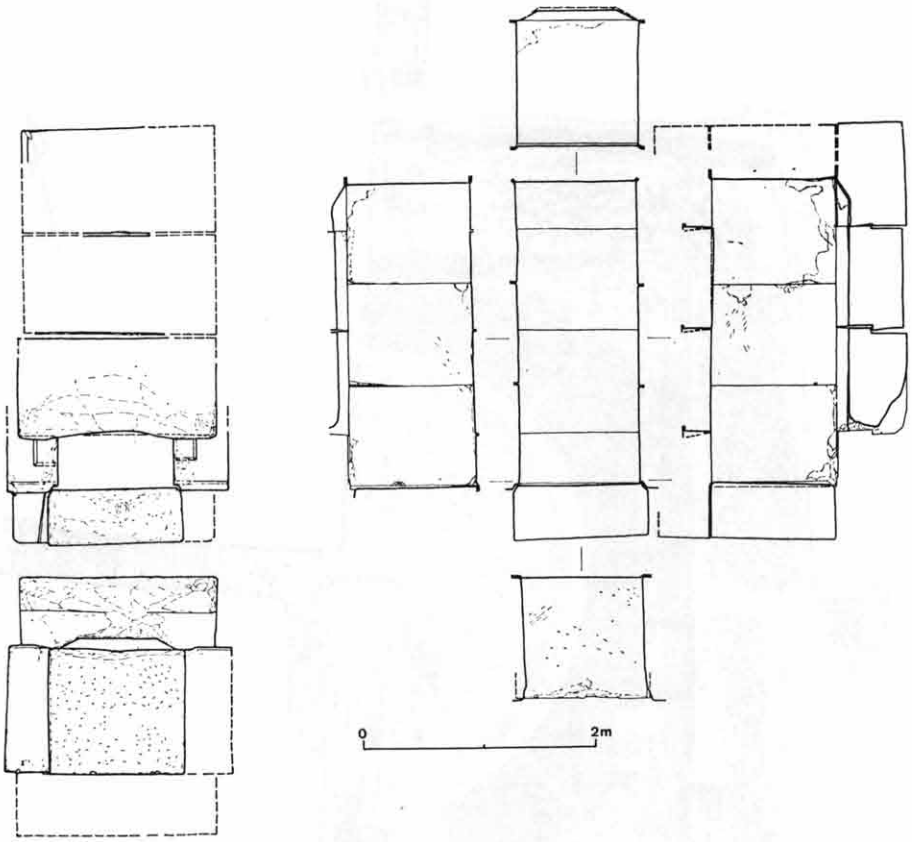
終末期古墳は多方面からの検討がなされている。例えば，石室，墳丘の築造企画論，各種文献との関連研究，大化の薄葬令との関連，石棺等



第2図　カザハヒ古墳測量図（京都府教育委員会『奈良山-Ⅲ』より）

に描かれた文様，磚槨墳と大陸文化との比較研究，墳丘立地に依る風水地理思想の研究等，従来の研究方法とはニュアンスを異にしている。

本古墳に関連した研究課題の中で，石室，墳丘の築造企画論が新しい視点で検討され始めている。企画論は従来，唐尺，高麗尺で論議されていたが，宮川 徙氏（文献，橿原考古学研究所，考古学論改第4冊）らに依り，新しい尺度「尋」で企画論が展開され，薄葬令



第3図　石　室　実　測　図

の理解にも重要な見解となっている。その他として，(1) 本古墳の「上円下方墳」と言う特異な墳形の初源は何処に求められるのか。(2) 被葬者は誰か。(3) 丘陵一帯には類似する遺跡がないが，この条件下で本古墳の立地をどの様に解釈するのが妥当なのか等，研究する課題を残している。

最後に，本古墳は京都府と奈良県の境界に位置し，一般的には奈良県側での呼称で広く知られているが，現在の行政区画を度外視し，丘陵一帯での位置を考える事が最も重要であると考える。

（小池　寛）

『奈良山―Ⅲ』京都府教育委員会　1973
長江正一「京都府相楽郡相楽村の方形墳」『考古学雑誌』11-1　1919
梅原末治「相楽村ノ方形墳」『京都府史蹟勝地調査会報告』6 1925

長岡京跡調査だより

昨年の12月に発足いたしました長岡京跡連絡協議会は，今年度から，当調査研究センターの長岡京跡整理事務所を会場として，毎月第４水曜日に開かれ，長岡京跡の調査に携わる各調査機関からの現場の状況報告などを行っている。今回は，６月から８月の長岡京跡連絡協議会で報告された内容を簡単に述べたい。

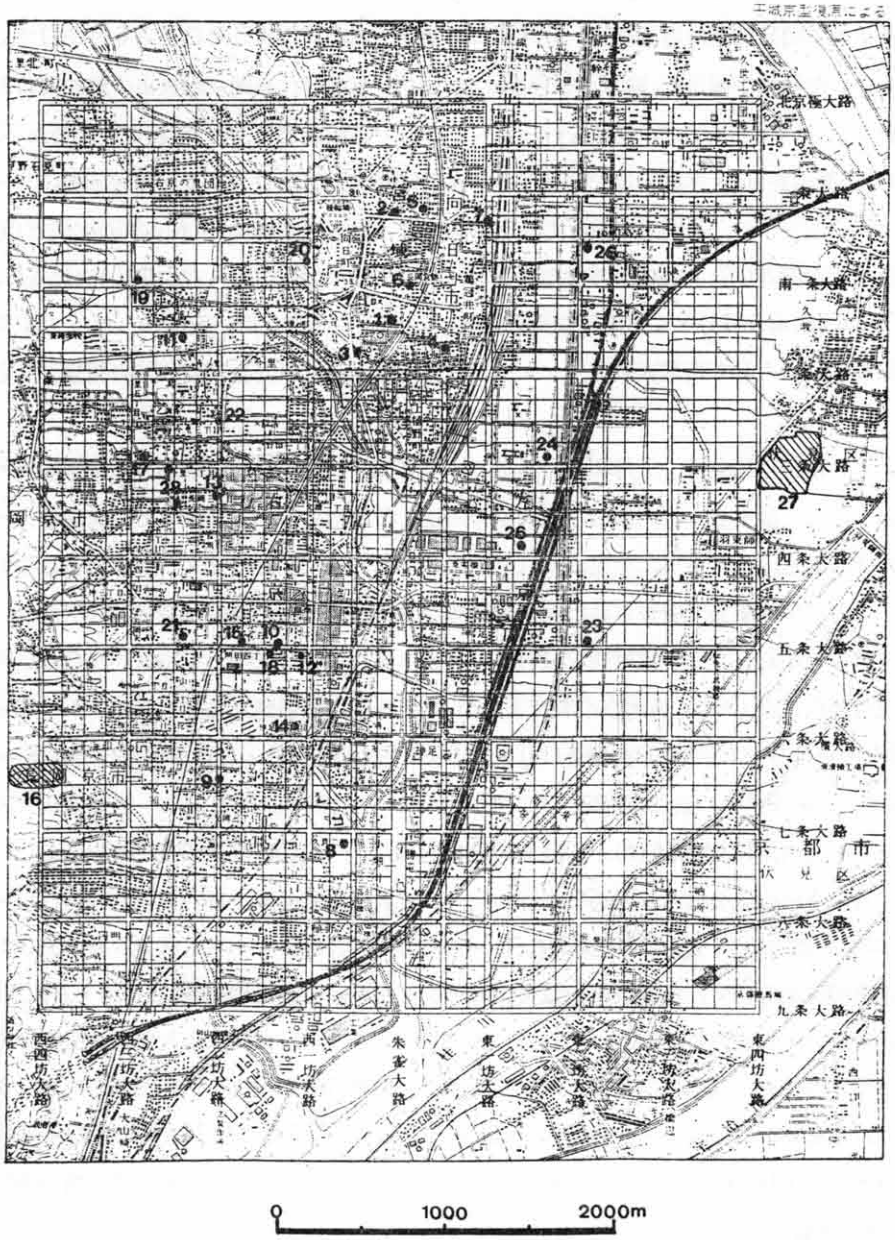
６月の長岡京跡連絡協議会は，６月23日に開き，昭和57年４月１日から６月23日までに実施された現場の報告と，向日市教育委員会の山中 章氏の『長岡京域検出の建物群の配置と機能』というテーマでの発表を行った。この日の協議会では，向日市教育委員会から，宮内第116次調査(1)・宮内第120次調査(2)・左京第88次調査(24)・左京第89次調査(25)・左京第90次調査(26)，長岡京市教育委員会から，右京第94次調査(8)・右京第95次調査(9)・右京第96次調査(10)・右京第98次調査(11)・右京第99次調査(12)・右京第101次調査(13)・右京第102次調査(14)・左京第87次調査(23)，京都市埋蔵文化財研究所からは，左京第91次調査(26)，そして当調査研究センターからは，電々公社の立会調査(28)の報告がなされた。

７月の連絡協議会は，７月28日に開き，各調査現場の報告と長岡京跡発掘調査研究所の百瀬ちどり，藤田さかえ両氏の『長岡京の条里と条坊制』というテーマでの発表を行った。また今回から，７月１日に発足した（財）長岡京市埋蔵文化財センターが参加者に加わった。この日の協議会で報告された調査現場は，向日市教育委員会が，宮内第116次調査(1)・宮内第121次調査(3)・宮内第122次調査(4)・宮内第124次調査(6)・右京第108次調査(20)・左京第89次調査 (25)，長岡京市教育委員会 及び 長岡京市埋蔵文化財センターが，右京第101次調査(13)・右京第102次調査(14)・右京第103次調査(15)・右京第104次調査(16)・右京第106次調査(18)，京都市埋蔵文化財研究所が，左京第91次調査(27)，当調査研究センターが，宮内第123次調査(5)・右京第105次調査(17)・右京第107次調査(19)である。

８月の連絡協議会は，８月25日に行い，向日市教育委員会が，宮内第116次調査(1)・宮内第121次調査(3)・宮内第122次調査(4)・宮内第124次調査(6)・右京第 108 次調査(12)・左京第89次調査(25)，長岡京市埋蔵文化財センターが，右京第103次調査(15)・右京第104次調査(16)・右京第106次調査(18)・右京第109次調査(21)，長岡京市教育委員会が，南原古墳第３次調査，京都市埋蔵文化財研究所が，左京第91次調査(27)，当調査研究センターが，宮内第123次調査(5)・宮内第125次調査(7)・右京第105次調査(17)・右京第107次調査(19)・右京第110次調査 (22)・の各調査現場の報告を行い，長岡京市教育委員会の中尾秀正氏が，『長岡京の市について』というテーマで発表を行った。

以上の３回の連絡協議会で，長岡京跡で行われた27件の発掘調査と１件の立会調査，そして長法寺南原古墳の調査成果が報告された。それらのうち主だったものについて，発表された成果を以下に略記する。

長岡京条坊復原図



宮内第116次調査　(1)

この調査は，長岡宮朝堂院西第4堂を対象とし，西第4堂が，やはり東西棟である事が確認され，桁行で8間分の根石が検出され，朝堂院の中軸線から桁行9間と推定される。また，朝堂院の西面築地と南面回廊の基壇の一部及びその北側の雨落溝を検出した。

宮内第120次調査　(2)

この調査では，長岡宮関係のものは検出しなかったが，古墳時代のカマドを有する竪穴住居跡が5基検出された。

宮内第122次調査　(4)

長岡宮の整地層を確認したにとどまった。

宮内第123次調査　(5)

調査地の北東部で，長岡宮のものと考えられる短辺約80cm，長辺約120cmの掘形を持つ東西方向の柱列を現在5間分検出している。

宮内第125次調査　(6)

長岡京期の流路を検出。この溝は，北西方向から南東方向に流れており，以前の宮内第87次調査で検出されたSD8701に続くものと思われる。今回検出した流路から現在，神功開宝と『家人四人』と記された木簡が出土している。

右京第96次調査　(10)

長岡京の五条大路の南北両側溝（SD9601，SD9607）を検出。溝心々間で約15mを測る。長岡京五条大路北側溝北側で，長岡京廃都後と考えられる轍跡やこの北側溝より古い轍跡を検出。

五条大路南側溝（SD9607）の南約2mの所で築地の雨落ち溝と思われる東西方向の溝（SD9606）を検出。また，この溝の南側で建物跡と考えられる柱穴列4間分を検出した。

古墳時代の溝（SD9603）が検出され，溝内からは紡錘車などが出土している。

今回の調査で検出された五条大路中軸線と三条大路中軸線との距離は約1,089mを測る。

右京第101次調査　(13)

長岡京関係の遺構は，検出されなかったが，古墳時代後期以降の掘立柱建物跡が検出された。

右京第102次調査　(14)

調査地は，長岡京の六条大路推定地付近に当り，東西方向の溝が2本検出された。溝内からは，『自司進』（表）『三年十二』（裏）と記された木簡や，人形，わらじ，麻布などが出土している。

右京第103次調査　(15)　長岡京期のものと思われる南北3間，東西3間の総柱の掘立柱建物跡を検出した。

右京第105次調査　(17)　鎌倉時代頃の溝や井戸，柱穴，土器だまりなどを検出しているが，現在，長岡京に関連したものは，検出されていない。

検出した井戸は，石積みで，内径で約80cmを計る。掘形は，1辺約230cmを計る。

右京第106次調査　(18)　1辺約25～26mの方墳の周濠を検出した。溝内からは，多量の円筒埴輪や形象埴輪が出土した。

右京第107次調査　(19)　現在，中世の溝や柱穴，土壙などを検出している。

右京第108次調査　(20)　調査地は，向日神社境内に当り，元稲荷古墳に近接している。検出遺構は，弥生時代のピットや土壙等で，弥生式土器とともに，扁平片刃石斧1，太形はまぐり刃石斧1，石包丁片3，石鏃2や石器の剝片多数が出土している。

右京第110次調査　(22)　調査地は，西二坊大路と三条条間小路の推定地に当るが，関連する溝は，現在検出されていない。

調査地の南半部で，南西から東北方向へ流れ，南東方向へ屈曲する自然流路と思われる溝を検出した。溝中からは，弥生式土器片が若干出土している。

左京第87次調査　(23)　中世の溝をいくつか検出したが，長岡京に関連したものは，検出できなかった。

左京第88次調査　(24)　護岸を施された東西方向の溝を検出し，溝中からは，長岡京期の遺物が出土している。三条大路の北側溝かと推定される。

左京第89次調査　(25)　東二坊大路推定東側溝（SD 8901）と南一条大路南側溝（SD8903）を検出した。SD8901は，幅約150cm，深さ約30～40cmを計る。SD8903は，深さ約30cmを計るが，北の肩が検出されておらず，幅は不明である。

SD8303の南側約60cmのところには，幅約10cm，深さ約20～40cmを計る東西方向の溝（SD8902）が存在している。この溝は，SD8901に合流した後，東へは延びていない。

これら3本の溝からは，長岡京期の土師器，須恵器とともに，墨書土器，墨書人面土器，人形，木簡が出土している。

今回出土した木簡のうちには，『位田并墾田』と記されたものや，『大宅朝臣廣成』，『秦人足』，『雅麻呂』などの人物名，そして『延暦九年十月』と書かれたものなどが出土している。これらのうち『雅麻呂』と書かれたものは，左京第13次調査においても出土している。

左京第９１次調査　(27)

長岡京の東限に当る付近であるが，現在は，調査地の東端部付近で，現在の道路に沿うような形で幅約30mにわたり，10世紀から14世紀頃の集落が検出されている。

電々公社の埋設管に伴う立会調査　(28)

四条条間小路推定地付近で，長岡京期頃の遺物の出土した東西方向の溝状遺構を検出した。また，三条大路推定地で，断面で溝状の落ち込みを確認している。

長法寺南原古墳第３次調査

今回の調査で，前方後方墳であることが判明した。全長は約60m，後方部１辺約40m，前方部長約20m，くびれ部幅約20mで，後方部三段，前方部二段に築成されていた。

（山口　博）

センターの動向

1. できごと (57. 6月～8月)

6. 7　昭和56年度事務監査

6.11　長岡宮跡第119次調査（向日市，乙訓郷土資料館建設予定地）関係者説明会実施

6.21～7. 3　奈良国立文化財研究所主催昭和57年度埋蔵文化財発掘技術者専門研修「土器調査課程」参加(石井調査員)

6.22　第4回役員会及び理事会開催
—於 パレスサイドホテル—

6.23　長岡京跡連絡協議会開催

6.24～25　第3回全国埋蔵文化財法人連絡協議会総会—於群馬県—出席（栗栖事務局長，堤調査課長，塔下主事）

7. 5　青野遺跡（綾部市）発掘調査開始。土師南遺跡（福知山市）発掘調査開始～7.9。古殿遺跡（峰山町）発掘調査開始。後青寺古墓（福知山市）発掘調査開始

7.12　長岡京跡右京第105次（長岡京市，都市計画道路石見，淀線内）発掘調査開始。長岡宮跡第123次（向日市，保健センター建設予定地）発掘調査開始

7.17　狐谷横穴群（八幡市）第2次調査終了5.14～

7.19　長岡京跡右京第107次（長岡京市，授産施設建設予定地）発掘調査開始

7.22　下畑遺跡（野田川町）発掘調査開始～8.10

7.28　長岡京跡連絡協議会開催

7.30　長岡京跡左京第125次（向日市，森本公民館建設予定地）発掘調査開始

8. 6　下畑遺跡（野田川町，府立加悦谷高校敷地内）関係者説明会実施

8.25　長岡京跡連絡協議会開催

8.26　第2回府，市埋蔵文化財法人事務連絡協議会開催

8.28～29　第12回埋蔵文化財研究会—於大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館—出席（原口理事，堤調査課長，松井主任調査員，村尾，竹原，戸原，岩松調査員）

2. 普及啓発事業

6. 5～6　第7回研修会—於加悦町町民会館—開催（発表者及び題名）石井清司「丹後における前期古墳出現の前提条件（野田川水系を中心として)」佐藤晃一「加悦谷地域の古墳」辻本和美「由良川水系の古墳概観（中丹地域を中心として)」金村 允人「後野丹山古墳の発掘調査」第2日目加悦谷の主要遺跡見学参加者延べ約130名

6.30　『京都府埋蔵文化財情報』第4号刊行

7.10　第8回研修会—於京都教育文化センター—開催（発表者及び題名）五十川伸矢「京都大学教養部校内ＡＰ22区の梵鐘鋳造遺構について」林　博通「滋賀県大津市滋賀里長尾遺跡の梵鐘鋳造跡について」神崎　勝「兵庫県多可郡

中町天田地区（多可寺跡）の梵鐘鋳造遺構について」友野良一「長野県寺平遺跡の梵鐘鋳造跡について」石尾政信「京都市広隆寺跡の梵鐘鋳造遺構について」参加者67名

7.17～31　第1回小さな展覧会開催
会期中309名入館

8.21～22　第9回研修会―於綾部市君尾山光明寺―開催（発表者及び題名）第1日目岡田晃治「久美浜町権現山古墳の発掘調査」梶本敏三「城陽市芝ケ原10号・11号墳発掘の調査」伊野近富「福知山市大内城中世墳墓の発掘調査」第2日目　楳林誠雄「重要民俗資料丹波焼収蔵庫保管品解説」小山雅人「青野遺跡発掘調査現地解説」参加者延べ約100名

3. 人事異動

4.16　橋本清一（総務課調査員）採用さる。

4.17　橋本清一（総務課調査員）京都府立山城郷土資料館へ派遣さる。

6.17　古澤俊彦（総務課主事）京都府教育委員会から派遣さる。

8.15　中村義明氏監事を解嘱さる。

8.16　加藤一治氏監事を委嘱さる。

受贈図書一覧（6～8月）

奈良県教育委員会	平城京左京（外京）五条五坊七・十坪発掘調査概要報告
千葉市教育委員会	昭和55年度文化課事業報告書，千葉市史跡整備基本構想，千葉・上ノ台遺跡，谷津台貝塚
東海大学史学会	東海史学 第16号
大宮市遺跡調査会	深作東部遺跡群発掘調査報告，膝子八幡神社遺跡，宮ケ谷塔第5貝塚
豊岡市立郷土資料館	但馬・高屋古窯，豊岡市文化財調査報告書集
豊橋市美術博物館	豊橋市美術博物館年報昭和56年度，豊橋市埋蔵文化財発掘調査報告書，一里山古窯址群
名古屋市教育委員会	ＮＮ-282号古窯跡発掘調査報告書
弥栄町教育委員会	いもじや古墳・奈具岡遺跡発掘調査報告書
京都女子大学史学会	史窓 第39号
大分市教育委員会	古宮古墳，絵図に見る近世後期の肥後領鶴崎
福山市立福山城博物館	福山市福山城博物館友の会だより No. 12
羽曳野市教育委員会	古市遺跡群Ⅲ，羽曳野市埋蔵文化財包蔵地分布図
滋賀県教育委員会	湖南中部流域下水道矢橋処理現場中間水路浚渫工事予定地内埋蔵文化財試掘調査報告書Ⅰ，大間寺遺跡発掘調査報告書
蒲郡市教育委員会	形原遺跡調査報告書
(財)東京都埋蔵文化財センター	東京都埋蔵文化財センター 年報2
仙台市教育委員会	燕沢遺跡発掘調査報告書
和泉市教育委員会	府中遺跡群発掘調査概要Ⅱ
大阪市立博物館	大阪市立博物館報 No. 21
東京都教育委員会	東京都島嶼地域遺跡分布調査報告書　―御蔵島・八丈島―　東村山市日向北遺跡
八王子市郷土資料館	井上コレクションの古瓦

田辺市歴史民俗資料館	田辺市三栖廃寺遺跡発掘調査概要，田辺市鬼橋岩岩陰Ⅱ遺跡発掘調査概要，高山寺遺跡発掘調査概報
（財）茨城県教育財団	石岡都市計画事業南台土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書，龍ケ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書6　竜ケ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書7，常盤自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書4，年報1，昭和56年度
佐賀県立博物館	本分具塚，佐賀県立博物館調査研究書 第8集
大津市教育委員会	真野・神田遺跡発掘調査報告書Ⅱ，埋蔵文化財調査集報Ⅰ，滋賀里・穴太地区遺跡群発掘調査報告書Ⅱ
福岡県教育委員会	松ケ迫2号墳，香春岳遺跡群調査概報
平賀町立郷土資料館	青森県平賀町唐竹地区埋蔵文化財発掘調査報告書，石郷遺跡（写真図録編），石郷遺跡（本文，実測図編），高田Ⅰ遺跡，堀合Ⅰ遺跡，堀合Ⅰ号遺跡
奈良国立文化財研究所	遺跡整備資料Ⅰ（寺院・国分寺跡），平城京西市跡 ―右京八条二坊十二坪の発掘調査―，平城京右京二条二坊十六坪発掘調査概報，昭和56年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報
茨城県教育委員会	茨城県遺跡・古墳発掘調査報告書Ⅲ
愛知県陶磁資料館	愛知県陶磁資料館研究紀要Ⅰ
（財）鳥取県教育文化財団	長瀬高浜遺跡発掘調査報告書Ⅳ
泉佐野市教育委員会	三軒屋遺跡，泉佐野市所在遺跡発掘調査概要Ⅰ　泉佐野市埋蔵文化財発掘調査概要Ⅱ，湊遺跡発掘調査報告書
宮津市教育委員会	中野遺跡第3次発掘調査概要
大阪府教育委員会	陶邑Ⅴ
（財）古代學協會	古代文化 第282号～第283号
静岡市教育委員会	駿河・豊田遺跡，静岡市丸子泉ケ谷地区遺跡分布調査概報
（財）枚方市文化財研究調査会	渚院跡遺跡調査概要報告
綾部市教育委員会	青野遺跡第5次発掘調査概報，青野南遺跡発掘調査概報，綾中遺跡発掘調査概報

相川考古館	御正作遺跡発掘調査概報
日本庭園文化協会	庭園文化 創刊号～第４号
成田山霊光館	北総の原始古代，民俗資料
（財）鳥取県教育文化財団	三浦遺跡，湖山第２遺跡発掘調査報告書
名古屋市見晴台考古資料館	高蔵遺跡発掘調査概要報告書
福知山市史編さん室	福知山市史 第二巻
（財）北九州教育文化事業団	新導寺・天疫神社前遺跡，茶屋原西遺跡，辻田西遺跡，日峰山遺跡，本城中学校北遺跡，荒神森古墳，稗田川遺跡，黒ケ畑遺跡
広島県教員委員会	中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（3），亀山遺跡― 第１次発掘調査概報―，下本谷遺跡第３次発掘調査概報，大宮遺跡第５次発掘調査概報，石鎚権現山古墳群発掘調査報告，熊崎城跡調査概報，小反田古墳，道照遺跡，横跡遺跡
京都府立丹後郷土資料館	峰山桃谷古墳
敦賀市歴史民俗資料館	特別展 日本の名刀展
九州大学文学部九州文化史研究施設	九州文化史研究所紀要 第27号〔考古学関係抜刷集〕
福井県立若狭歴史民俗資料館	鳥浜貝塚 1980年度調査概報
滋賀県教育委員会	北陸自動車道関連遺跡発掘調査報告書Ⅷ
山口大学人文学部考古学研究室	伊倉遺跡発掘調査概報
和泉丘綾内遺跡調査会	和泉丘陵内遺跡発掘調査概要Ⅰ
国立歴史民俗博物館	国立歴史民俗博物館研究報告 第一集
木津市教育委員会	相楽山銅鐸出土地発掘調査 ―現地説明会資料―
（財）滋賀県文化財保護協会	近江の文化財教室，滋賀文化財だより
北見市北見郷土博物館	北見郷土博物館紀要 第12集
西紀・丹南町教育委員会	大滝二号古墳
（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団	埼玉県埋蔵文化財調査事業団 年報２

釧路市立郷土博物館	釧路市立郷土博物館紀要 第9輯，昆虫標本目録 (2)
（財）愛媛県埋蔵文化財調査センター	一般国道11号松山東道路関係遺跡埋蔵文化財調査報告書（Ⅳ）
魚津市立歴史民俗資料館	富山県魚津市早目上野遺跡
中 谷 雅 治	中国の都城遺跡
小 野 正 敏	史跡杣山城跡Ⅰ，江馬氏城館跡発掘調査概報，豊原寺跡Ⅰ華蔵院跡第1次発掘調査概報
岡 田 登	三重県津市垂水発見の埴輪窯について（皇学館論叢 第15巻 第2号抜刷）
林 野 由 美	古代の農具
清 水 真 一	鳥取県東伯郡羽合町・長瀬高浜遺跡出土の小銅鐸について（『考古学雑誌』 第68巻 第1号抜刷）

—編集後記—

○先般，当調査研究センターの資料室に於いて，「小さな展覧会」を催した。特に展示施設がある訳でもなく，展示のために用意した物品と言えば，土器台座ぐらいであった。最近，展示施設が完備された博物館及び博物館相当施設が常識化した中で今回の展覧会は，「展示」の本質を我々に問い正す機会となった。ガラスケースの中の土器と，直接近づいて見れる土器。多くの問題点はあっても，見学者にとって，直接近づける土器の方が好い状態であろう。一目瞭然であろう。第2回の展覧会の企画も始まっている。

○今回，掲載した「葉椀」「葉皿」考は，京都市内の発掘で出土した資料をもとに，その考察を研究ノート的にまとめたものである。当調査研究センターも基礎資料が蓄積され，尨大な量になっている。今後，このような研究ノートが増えるだろうが，皆様の御批判，御叱責をお待ちしています。又，情報の充実のため，皆様の資料紹介及び研究ノート等を投稿していただければ幸いです。

（編集担当　小池　寛）

京都府埋蔵文化財情報 第5号

昭和57年9月30日

発行　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター
〒602 京都市上京区広小路通寺町東入ル中御霊町424番地
TEL (075)256-0416

印刷　中西印刷株式会社
代表者　中西　亨
〒602 京都市上京区下立売通小川東入
TEL (075)441-3155 (代)